

先生方とともに
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉
高校版
2020
Volume 1

4月

VIEW21

今、できること

特集

「あり方・生き方」を考える ——主体的な進路選択のために——

緊急ヒアリング&オンラインインタビュー
臨時休校要請 教師は、何を考え、どう動いたか

新課程に向けて推く「学校教育デザイン」

福岡県立小倉商業高校

主体的・対話的で深い学びへ
実践 アクティブ・ラーニング

現代文 東京都立戸山高校 美田 恵

指導変革の軌跡

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校

新連載

SDGsの視点で見る
大学の学び



生徒と紡ぐ

情熱教師 File

no. 19

今月の表紙

島根県立松江南高校
吉村竜成^{りゅうせい}先生



Profile

吉村竜成先生 教職歴10年。同校に赴任して2年目。2学年担任。進路指導部。野球部顧問。

島根県立松江南高校 全日制／普通科・理数科／共学／1学年 約280人／2019年度入試合格実績（現浪計）国立大は、大阪大、神戸大、鳥取大、島根大、九州大などに163人が合格。私立大は、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ297人が合格。

全力でわくわく

現任校に着任して2年目の2019年度、吉村竜成先生は初めて学級担任を受け持った。学校行事や部活動の中心となりながら、進路に思い悩むことも増える2年生。学級づくりで大切にしてきたのは、生徒一人ひとりとの関係をしっかり築くことだ。「生徒個人と担任との信頼関係があり、それが生徒の数だけ重なることで、よい学級ができると思うのです」と吉村先生。成長する生徒の姿を思い描き、自分なりに支援しようと働きかけてきた。

高校生活を授業と部活動だけに終わらせず、学校の外に出て視野を広げてほしい——。多様な人との出会いや様々な経験を重ねることを願い、生徒が参加できる社会的な活動を探したり、企業や自治体に依頼して社会人の話を聞けるようにしたりと、生徒の志望に応じて機会を提供し続けた。「希望進路は、1つに決まらずに悩んでもよいから、まずは選択肢を持っていること

が大切だよ」と、生徒に語りかける。

担当教科の数学でも、大切にするのは社会とのつながりだ。定理や公式、記号が生まれた社会的背景を説明したり、学習内容が実社会で活用されることを実感できる出題にしたりと、受験のためだけの学びとまらないようにする。前任校から授業に知識構成型ジグソー法（*1）を取り入れたのも、「数学の知識だけではなく、周りとの力を合わせて問題を解決する力を育みたいから」と、その思いを語る。

この1年、どのようなことが起きても、生徒を頭ごなしに否定しなかった。「吉村クラスは居心地がよいクラス！」と生徒は口をそろえる。

吉村先生も、「自分を出しても大丈夫と、クラスが安心できる場になったのかもしれません。主体的に動く生徒が増えてきたと感じています」と、生徒の変化を喜ぶ。そして、「先生が友人のように感じることもある」と言われるほど、生徒との距離は近くなった。副担任の時とは比較にならないほど、友人関係や進路のことを相談されるようになり、中には誰にも言えなかった悩みを打ち明けた生徒もいた。「担任の醍醐味を感じるのと同時に、責任の重さも身に染みだ。生徒たちの思いに応えていきたい」と、決意を新たにす。

4月からは3学年の担任となることに「わくわくしています」と吉村先生。学級担任として初めて送り出すことになる生徒たちが笑顔で春を迎えられるよう、全力投球の1年がまた始まる。

2 緊急ヒアリング&オンラインインタビュー

臨時休校要請 教師は、何を考え、どう動いたか

6 特集

「あり方・生き方」を考える

— 主体的な進路選択のために —

- 8 実践事例 1 東京都・私立品川女子学院中等部・高等部
- 12 実践事例 2 愛知県立東海商業高校
- 16 インタビュー 慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 教授 前野隆司
- 20 ドキュメント 岩手県立高田高校
- 26 実践者に聞く 東京大学大学院 総合文化研究科 教授 梶谷真司
- 28 生徒の・教師の・自校の・社会のNEXTを語り合うワークシート

連載

- 30 新課程に向けて描く「学校教育デザイン」福岡県立小倉商業高校 **リニューアル**
- 34 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング 現代文 東京都立戸山高校 美田 恵
- 38 指導変革の軌跡 探究学習 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校
- 42 改良! 指導ツール ビフォーアフター 2年生 学部・学科調べワークシート 静岡県立下田高校 **リニューアル**
- 46 SDGsの視点で見る大学の学び **新連載**
 全体概観 九州大学工学研究院 主幹教授、都市研究センター長 馬奈木俊介/
 九州大学 工学部 地球環境工学科 建設都市工学コース 都市・交通工学研究室
- 52 NEXTリーダーがオンライン&オフラインで集まり、語り合う 若手教師・教育創造MTG **新コーナー告知**
- 54 一 疑問や課題を解決! 実践につながる! 新課程レポート 岡山県立林野高校 **新連載**
- 60 Reader's VIEW
- 巻末 教師を育てた言葉たち「日々に磨かん 智と徳と」山口県立下関南高校 松村成通

今、できること

いつも『VIEW21』高校版をお読みいただき、ありがとうございます。

新年度は、例年とは大きく様相の異なるスタートとなりました。学校現場では、この度の新型コロナウイルスの感染拡大を受け、2月27日、政府より、全国すべての小・中学校、高校、特別支援学校に、春季休業までの臨時休校が要請され、3月2日から、多くの学校が休校となりました。

突然の休校に、現場の先生方は何を思い、考え、どのような行動をされたのか。編集部では、現場の先生方に緊急ヒアリングとオンラインによるインタビューを実施し、状況を伺いました。そこには、「生徒のために、今できること」を一生懸命考え、それを実行する先生方の姿がありました(次ページから、ヒアリング及びインタビューの詳細をお伝えしております)。

本号の製作では、休校の影響で発刊が危ぶまれる局面もあり

ました。しかし、こうした時だからこそ、頑張られている学校や先生のお取り組みを学校現場に届けようと、編集部一同、「今できること」に全力を尽くしました。その結果、一部、製作を見送ったコーナーがあるものの、現場の先生方を始め、多くの方のお力添えのおかげで、これまでとほぼ同じラインアップで、本号をお届けすることができました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

「今できること」に精いっぱい取り組む。それは、どのような時でも大切なことですが、様々な制約がある今だからこそ、より求められることなのかもしれません。本号を通じて、先生方の「今できること」をご支援するとともに、先生方に少しでも勇気や元気をもたらすことができましたら、幸いです。

1日も早く事態が収束すること、そして、生徒の皆様や先生方が日常を取り戻されることを、心より祈念しております。

VIEW21 編集部 統括責任者 柏木崇

臨時休校要請


教師は、何を考え、どう動いたか


新型コロナウイルスの感染拡大を受け、2020年2月27日、政府は、全国すべての小・中学校、高校、特別支援学校に春季休業までの臨時休校を要請した。それを受けて、高校でも多くの学校が3月から休校した。突然、長期の休校を余儀なくされた今回の事態に、学校や教師はどのように対応したのか。また、生徒は休校中をどのように過ごしたのか。現場の高校教師への緊急ヒアリングと、オンラインインタビューを実施し、その実情を聞いた。


2/27

政府より、全国の小・中学校、高校、特別支援学校に休校要請が出される

突然の休校要請。教師は、生徒にこれからのように過ごしてほしいと思ったのか

 自分は何をすればよいのか、何に頼ればよいのかを、自ら考える時間にしてほしい。それらを考えなかったとしても、そのことがどういった結果を生むのかを、自分事として実感できる機会になる。自分の代わりに考えてくれる人がそばにいては、いつまで経っても自分事として捉えられなくなるからだ。(長崎県)


 「これからの社会で求められるのは、主体性」と生徒に常々伝えてきたことが、まさに問われる状況になった。休校中の過ごし方が、高校生活に大きな影響を及ぼし、学力差の広がりも懸念される。己を律し、志を持って毎日を送ってほしいと思った。我々教師にも、「主体性」とは何かを考え、これまでの指導を振り返り、今後の指導を考える機会になったのではないかと。(秋田県)


 授業に加えて部活動も長期にわたって休みとなるのは、普段では考えられないチャンスと捉え、今までの授業で理解できなかった部分の総復習をしてほしいと思った。授業や課題に受け身で取り組むのではなく、自ら進んで学ぶことがいかに学力を伸ばすのか、主体的に学ぶことの楽しさを知ってほしいと思った。(秋田県)


2/28

多くの学校で年度内の最終登校日

最終登校日、教師は、生徒にどんなメッセージを送ったのか

 1時間程度のホームルームだったが、クラスのよかった点を褒めるとともに、地域のことを考える気持ちや夢を抱くことの大切さを語った。そして、4月から希望進路の実現に向けて動き出すために、休校中をどう過ごせば有意義なものになるか、自分自身でできることを考えて実行しようとした。(宮城県)

 学年集会ができず、最終登校日に、学年主任として私が書いたプリントを配布してもらった。何をするかを生徒に考えさせようと、あえて抽象的な言葉を選んだ。「(略) 休み明け、3年生に進級すると進路選択が本格化するが、全国のライバルがこの休みをどう過ごしているのかを想像しよう。このチャンスをつかみなさい。今、みんなに求められているのは、真の『学ぶ力』だ」(静岡県)

 「休校中の過ごし方で、受験の結果は変わるだろう。過去問題など、教材はたくさんある。課題にプラスアルファの勉強をして、来年の今頃は笑ってしよう！」と、生徒に話した。「勉強しておかないと大変だ」と不安をおおるのではなく、「ここで勉強すれば得だぞ！」といった前向きな思いを持たせるように心がけた。(福岡県)

生徒のために今できることを考え、行動した。

4月第2週

新年度・新学期が始まるも、一部の地域は休校を延長

3月第4週

多くの学校で春季休業開始

3/2

多くの学校で休校開始

教師は、生徒のどんな成長を見たのか



eポートフォリオでの学習記録を見ると、日頃できなかった読書など、生徒は思った以上に教科以外の学びに時間を割いていた。「早く学校に行きたい」と書く生徒も多く、他者と学ぶことの意義に気づいたようだ。ただ、学習に取り組んでいる生徒とそうではない生徒の差が広がっていると感じる。主体的に学習できる力の育成の重要性を改めて感じた。(北海道)



本校では「Compass」(*2)のタイムラインに学習や生活の記録をさせたところ、自分で考えた模擬試験の対策法をアップし、教師にコメントを求めてきた生徒がいた。その前向きな姿勢は、職員室の明るい話題となった。授業のない状況下で、学びに対して渴きを感じたのだろう。普段でも学びに渴きを感じる状況をつくれれば、おのずと自律的学習者になると思った。(大分県)



本校では、学年末考査終了後から4月までの課題を既に出していたため、休校中、多くの生徒は自分のペースで主体的に学習を進められていた。ただ、家庭学習では、生徒同士の教え合いなど、周りから刺激をあまり受けることができない。対話的な部分はSNSでは十分できず、深い学びは難しいのかもしれない。(福岡県)

休校期間中、教師は、生徒とどのようなやりとりをし、何を感じたのか



メールでのやりとりや、登校日や個別の事情で学校に来た生徒との対話では、「しっかりやっています」と言う生徒が多かった。ただ、生徒が取り組む内容が想定内で、可能性が感じられず不安だ。家庭学習が本当に自分の身になっているのかどうか分からず、生徒の声が自信がなさそうだった点も、気になっている。(茨城県)



出校日のみの登校とし、学級ごとに担任が対応した。生徒に毎日の部活動の自主練習の記録を見せてもらい、休校中の過ごし方を確認し、励ました。自分のことを伝えるのは、生徒にとって生き生きとした時間のようなだった。(福岡県)



生徒の質問には、「Classi」(*1)でのコメントのやりとりで回答し、理解してもらえた。添削は、eポートフォリオに生徒に解答をアップしてもらい、その生徒と作成したグループで教師が添削した画像を送った。また、学習時間を入力してもらい、学年平均と学年トップの学習時間を学年のグループにアップする「勉強マラソン」を2日間実施した。自覚を持って学習した生徒は、自ら学習する効果の高さを実感した



毎朝定時に健康観察アンケートをアプリで配信。3日連続で返信がなければ、電話連絡することにした。生活リズムを整える一助にしてもらおうと、連絡事項は12時、課題は16時に配信。「過去問に挑戦します」「自分の勉強を始めました」といった生徒のコメントに、自覚を持って生活する姿がうかがえて安心した。(青森県)



週1回、生徒一人ひとりに電話し、生活の状況や課題の進捗、困ったことなどを確認した。普段は勉強熱心ではない生徒が、電話越しに「頑張っています!」と元気に答えてくれ、うれしかった。(長崎県)

オンラインでのコミュニケーション例

生徒：進路について考えた。休校中にある程度決めたい。

教師：よい時間の使い方をしていますね。まとまった時間に、じっくりと自分と向き合おう!

生徒：休みが始まって1週間。このままモチベーションを保ちたい。

教師：そうですね、このモチベーションを維持していきたいですね。そのためには、何が必要だと思いますか。

のではないが。(秋田県)

今後、顕在化してくるであろう課題を受け止める覚悟を持ちながら、教師は、

*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
*2 生徒個人にフォーカスして、多面的な分析を基にした効果的な面談指導をサポートする指導支援ツール。

教師は、何を考え、どう動いたか

オンラインインタビュー

福岡県・福岡市立福岡西陵高校 校長

(2020年4月より兼任)

和田美千代

2月27日夜、新型コロナウイルス

の感染拡大を防ぐために、政府は全国の小・中学校、高校、特別支援学校に対し、3月2日から臨時休校するよう要請をしました。帰宅中にそのニュースを知った私は、急いで当時の勤務校の福岡県立城南高校に戻り、オンラインを活用した生徒支援の可能性を先生方と検討する準備を始めました。私は、福岡県教育センターに籍を置いていた5年前に、アクティブ・ラーニングの研究に取り組む中でZoom(*1)のことで知り、それ以降、Zoomを通じて全国の先生方とアクティブ・ラーニングの勉強を続けていました。そのため、今回の臨時休校の要請を知った瞬間、「これまでの学びを生かして、自分にできることがきつとあるはずだ」と思ったのです。

当時の城南高校には、授業動画を

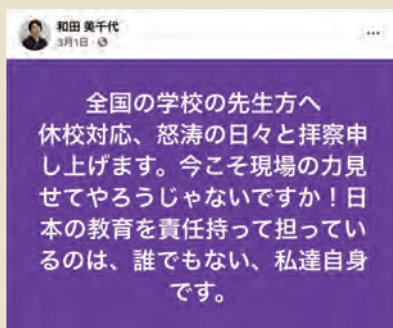
YouTubeにアップしている

先生がいましたが、クラスのホームルームや部活ミーティングなどは、画面で対面してコミュニケーションが取れるZoomが向いていると思いました。先生方からその使い方を教えてほしいとの声が上がったので、3月5日には、私も講師となつて、希望する先生に向けたオンラインツールの活用講習会を開催しました。早速、運動部の顧問が部長とのミーティングにZoomを活用し始め、さらに、担任のクラスの生徒と行うオンラインホームルームへと発展させていきました。

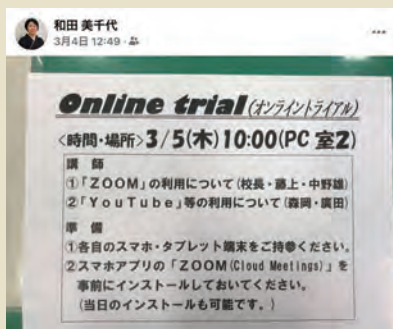
休校中の職員会議で、私が先生方



予測だにしなければならなかった状況だからこそ、常識にとらわれずにチャレンジを



3月1日、SNSでの呼びかけ。「日本全国の先生方と一緒に頑張りたいと思ったのです」と和田先生。(和田校長のFacebook投稿より)



3月5日には、オンライン会議ツールを活用した生徒支援のための校内講習会を和田校長自ら開催。(和田校長のFacebook投稿より)

に伝えたのは、「こうした状況だからこそ、常識や前例にとらわれず、いろんなことにチャレンジしてください」ということです。ある若手の先生が、「オンラインで生徒とのコミュニケーションを始めることを、学校名を出してSNSで紹介してもよいでしょうか」と相談がありました。私は、「全国の先生方の役に立つこと、勇気づけることなのでから、もちろんOKですよ」と答えました。中には、「ICT環境が整っていない家庭の生徒がいるかもしれないから、やめた方がよいのではな

いか」と、率直に私に思いをぶつけてくださる先生もいました。その気持ちもとてもよく分かります。私は、そういった生徒たちがどうすればオンライン参加が可能になるか、知恵を絞るべきだと考えます。

予測だにしなければならなかったこの状況下で、これまであたり前だと思っていたことの中にも、変えられること、変えるべきことがあったことに気がついた先生は多いと思います。新しく着任した福岡西陵高校は、福岡市教育委員会の支援のおかげでICT環境の整備が進んでおり、オンライン学習サポートが実現できそうな予感がしています。

*1 PC・スマートフォン・タブレットで通話に参加できるビデオ通話アプリ/サービス

オンラインで中高生が学びを深めた「ベネッセSTEAMフェスタ」

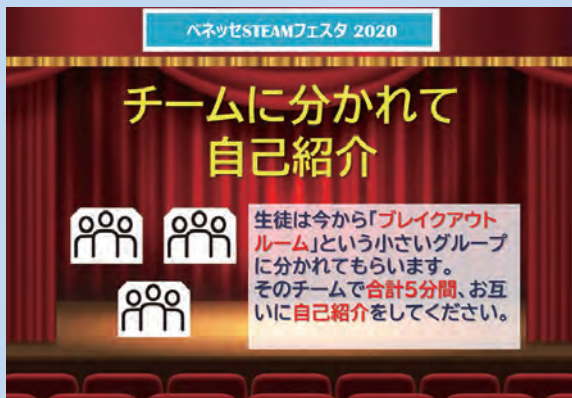
中学生、高校生が、自身の興味・関心に基づいた探究活動の成果を研究や作品にして発表し、各分野の専門家や企業人と対話、交流する「ベネッセSTEAMフェスタ」。当初、3月20日に都内の会場で開催の予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、オンラインでの開催となった。

当日は約80人の生徒、高校教師、大学教授らが参加。アカデミック、ソーシャルイノベーション、School Maker Faireの3部門の発表・講評などが、オンライン上で行われた。生徒の研究成果は、事前にWeb上で参加者に公開され、感想や質問も同サイトに自由に書き込めるようにすることで、発表者と参加者同士の対等な対話を可能にした。当日は、オンラインへのログインに手間取る生徒もいたが、「ベネッセSTEAMフェスタ」スタッフが待機し、チャット機能を利用して参加者一人ひとりに丁寧に対応。スムーズにオンライン参加できるように支援した。

また、参加者をオンライン上で小グループに分け、そのグループ内で自己紹介や振り返りを行うなど、参加者の交流が進みやすくなるように配慮がなされた。

「ベネッセSTEAMフェスタ」の開催責任者は、「生徒だけでなく、社会人や専門家など、参加者全員が学び、新しい価値を生み出す場をデザインするという意味では、オンラインでの開催にはメリットが多くあった」と振り返る。

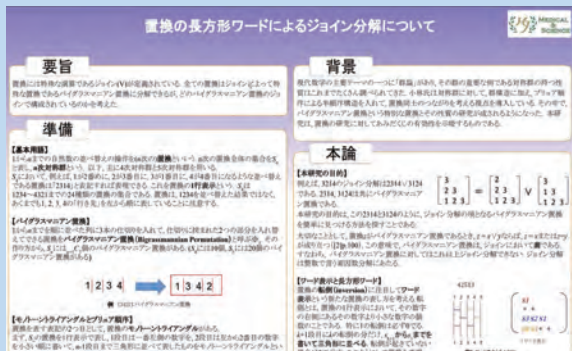
「インターネットによる学びの場が整備されたことで、中高生でもいち早く一人前の探究者となれるような高速道路ができました。しかし、その先にあるのは大渋滞です。皆さんには、大渋滞を突き抜ける大胆な挑戦をしてほしい。私たちは、大人がすぐには理解できないような挑戦を楽しみにしています。皆で社会を揺さぶるような挑戦をしましょう」（同責任者）



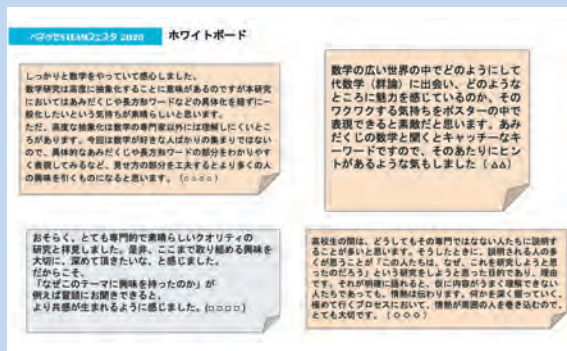
オンラインで開催された「ベネッセSTEAMフェスタ」。参加者全員での話し合いや少人数規模での対話がWeb上で部屋（ルーム）を分けて行われた。



ログインできた後も、マイク機能やカメラ機能上の使用トラブルに見舞われた中学生、高校生に対して、複数のスタッフが対応。全員がオンラインでの交流を楽しむことができた。



高校生グループの作品例。中学生の時に「あみだくじ」に興味を持った経験を基に、研究をスタートさせたという。



参加者は、事前に対象に対する感想や質問をWeb上に書き込むことができた。活発なやりとりがフェスタ当日への期待を高めた。

ベネッセSTEAMフェスタの当日の詳細は、右の開催レポートでご覧いただけます ▶ <https://steamfesta.benesse.co.jp/report.html>

「あり方・生き方」を 考える

——主体的な進路選択のために——

予測困難で変化の激しいこの社会を、生徒はどのようにして生きていけばよいのだろうか。

新学習指導要領に関する中央教育審議会の答申(*)に、次のような一節がある。

「予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である」

進路選択においても、自分の人生に主体的に向き合うことが今後一層求められるが、そこで鍵となるのが、新学習指導要領の総則等にも示されている、自己の「あり方・生き方」を考えることだ。

今号では、どのような教育活動が、生徒が自身の「あり方・生き方」を考えることにつながるのか、そして、それらを考えることで、生徒にどのような変容がもたらされるのかを、実践事例や識者へのインタビューを通じて、ひも解いていく。

を考えることで 生徒の変容



「どう生きたいのか」を考えて、実践するのは難しいことですが、それができるようになると、その人自身も生きるのが楽になり、幸福になります。

慶應義塾大学大学院 教授 前野隆司

P. 16-19

「あり方・生き方」を 考えることにつながる 2校の実践



生徒の希望を聞きながら、「どう生きていきたいのか」といった人生観を語らせ、具体的な進路に結びつけていきます。

愛知県立東海商業高校

P. 12-15



他者との協働や自己の内省があるからこそ、他者のことまでもよく考えて、自分の生き方を選べる人になれるのだと思います。

東京都・私立品川女子学院中等部・高等部

P. 8-11

*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

新学習指導要領に示される 「あり方・生き方」を**考える必要性**

第1章 総則 第5款 1(3)

生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要として各教科・科目等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、**生徒が自己の在り方生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。**

出典／文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」

*文章中の太字・網かけは編集部によるもの。

第3章 第2節 目標の趣旨 1(3)

自己の在り方生き方を考えることについては、次の三つの角度から考えることができる。一つは、人や社会、自然との関わりにおいて、自らの生活や行動について考えて、社会や自然の一員として、人間として何をすべきか、どのようにすべきかなどを考えることである。二つは、自分にとっての学ぶことの意味や価値を考えることである。取り組んだ学習活動を通して、自分の考えや意見を深めることであり、また、学習の有用感を味わうなどして学ぶことの意味を自覚することである。そして、これら二つを生かしながら、**学んだことを現在及び将来の自己の在り方生き方につなげて考える**ことが三つ目である。学習の成果から達成感や自信をもち、自分のよさや可能性に気づき、人間としての在り方を基底に、自分の人生や将来、職業について見通し、どのように在るべきかを定めていくことである。

出典／文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」

*文章中の太字・網かけは編集部によるもの。

生徒が「あり方・生き方」を 考えるための手立て



自分のあり方や生き方を考え、それらを深めるのは、様々な経験の中で得た気づきや疑問、不安などを他者と共有する中においてではないでしょうか。

東京大学大学院 教授 ^{かじたに}梶谷真司

P.26-27

「あり方・生き方」 もたらされる



地域で活躍する人たちの話を聞き、情熱に触れる中で、「将来こんなことをしたい」という思いが、自分の中からたくさん出てくるようになりました。

^{たかた}岩手県立高田高校

P.20-24



生徒の・教師の・自校の・社会の
NEXTを語り合うワークシート

今号の特集のテーマを校内の教師同士で深めるツールとして、ご活用ください

P.28-29



このマークのある図版は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け」をご覧ください。

東京都・私立品川女子学院中等部・高等部

28歳の自分を思い描き、その実現に向けて 必要なことを見つけ、行動する力を育む

「社会で活躍する女性の育成」をミッションに掲げる東京都・私立品川女子学院中等部・高等部では、自分の人生を能動的に築いていける力の育成を目指して、2003年度から「28project」を推進している。社会とのかかわり、他者との協働、他者評価・自己評価などを重視する探究学習を中心に据えたその取り組みを見ていく。

人生のターニングポイントで 能動的に進める力を育む

東京都品川区に位置する私立品川女子学院中等部・高等部は、完全中高一貫教育を行う女子校だ。漆紫穂子^{うるしほこ}理事長が教諭・校長時代から学校改革に取り組み、進学実績を上げてきた。

進学指導に力を入れる中、学力が伸びる生徒は、目的意識を明確に持ち、学習への動機づけを自らできていることに着目し、目的意識を持たせるための活動を取り入れてきた。その推進の過程で、同校の教育活動の軸となったのが、28歳の時に社会で活躍する自分の姿をイメージ

し、そこから逆算して必要な資質・能力を身につけることを目的とした「28project」だ。神谷岳副教頭は、28歳をゴールとした理由をこう語る。

「大学卒業後に就職した場合、28歳は社会人5〜6年目にあたります。仕事を一通り覚え、自分は社会にどのような貢献ができるのかを考え始める時期でしょう。そして、私生活では、結婚や出産を考えるようになる時期でもあります。そうした人生のターニングポイントにおいて、自分で目標を見いだし、その達成に向けて行動する力や、前向きに自分自身を動機づけする力を育むことを目指しています」

「28project」は、2003年度に、

既存の教育活動を整理してスタートし、様々な試行錯誤を経て、現在の形に至った。その過程においてプロジェクトの趣旨が教師間で共有され、今では、どの教師も28歳の生徒の姿を念頭に置いて、生徒と接している。進路進学指導部長の斉藤浩司先生は、次のように説明する。

「生徒には、『高校卒業後10年の節目にもなる28歳の自分を思い描いていこう』と、授業やホームルーム活動、学校行事など、様々な場面で伝えていきます。『28project』が本校の教育活動の中心であることは、生徒も自覚しており、28歳を1つのマイルストーンとして、自分はどうありたいのかを考え続けます」

動機づけにも通じる デザイン思考を学ぶ

「28project」の特徴は、社会と直接かかわりながら、チームで協働して取り組む数々の探究学習にある(図1)。同校では、14年度、SGH(*1)の指定を受けたことを機に、生徒への育成を目指す資質・能力を「問題発見力」「共感力」「発信力」「内省力」「英語プレゼン力」「英語コミュニケーション力」の6つに設定。多くの体験を通して失敗と成功を繰り返しながら、挑戦する姿勢を持ち、他者と協働して物事を成し遂げる力を育むというねらいの下、地域や企業、大学と連携していた従来の活動

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。

を見直し、中高6年間にわたる探究学習のカリキュラムを構築した。

探究学習の教育的効果をより高めるために取り入れたのが、「デザイン思考」の学習だ。それは、日常生活



副教頭、1学年主任
神谷 岳
かみたに たけし



進路進学指導部長
齊藤浩司
さいとう ひろし



CBL担当
丸山智子
まるやま ともこ
教職歴8年。同校に赴任して4年目。家庭科担当。

東京都私立品川女子学院中等部・高等部

◎校是「自ら考え、自らを表現し、自らを律する」の下、「社会で活躍する女性の育成」を目指した教育活動を行う。2004年度から中高完全一貫教育校に移行。14年度から5年間、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」指定校。

◎設立 1925（大正14）年

◎形態 全日制/普通科/女子校

◎生徒数 1学年約200人

◎2019年度入試合格実績（現役のみ）

国公立大は、筑波大、千葉大、お茶の水女子大、東京農工大、横浜国立大、首都大学東京などに15人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大学、法政大、明治大、早稲田大などに延べ714人が合格。

◎URL <https://www.shinagawajoshgakun.jp>

活の中からユーザーのニーズや課題を発見し、事業・サービスのコンセプトを練り上げ、試作し、新たな価値を生み出すという手法で、企業では新商品の開発などに活用されている。その手法が、探究学習における問題発見の過程だけでなく、生徒自らが人生における動機づけをするこ

とも生かせると考えた。「『デザイン思考』では、テーマとする対象をインサイト（洞察）するとともに、自分の関心・意欲の中から問題意識を掘り起こしていきま

す。その手法は、人生において自分が進む道を見いだす過程と重なると考えました。探究学習でも人生でも、『それはおかし』『これを何とかよくしたい』といった思いを大事にしてほしいと考え、1年次から段階を追って『デザイン思考』を学べるようにしました」（神谷副教頭）

外部と連携した活動では、外部講師の話を聴くだけでなく、外部講師と生徒が対話し、協働作業をする場を必ず設けている。「保護者でも教師でもない大人と

じつくり意見を交わし、時には同じ人と何度も対話する中で、仕事や人生への向き合い方など、深い話を聴くことができるでしょう。また、その人の姿勢から生徒自身が感じるものもあるはずです。そうした経験を積み重ねる中で、自分はどう仕事に向き合っていくのか、大人になっただろうありたいのかを内省すること

を期待しています」（神谷副教頭）

「1年次からの積み重ねで自律した活動ができるように」

「28project」の主な内容を具体的に

1年次からの積み重ねで自律した活動ができるように

「28project」の主な内容を具体的に

1～3年次は、「地域・日本・世界を知る」を切り口にした体験学習で、デザイン思考を実践し、視野を広げるとともに、チーム活動の基礎を学ぶ。そして、3年次の「企業コラボレーション総合学習」では、企業と共同で新しい商品やサービスの開発に挑戦する。そうした経験を積み重ねた上で、4・5年次は「起業体験プログラム」、5年次は家庭科でCBL（*2）に取り組む。

「起業体験プログラム」は、クラス単位で株式会社を設立し、文化

図1 「28project」における主な取り組み

プログラム名	実施学年	内容
デザイン思考の育成	1年次から順次	デザイン思考は、新たな価値や商品を生み出すための手法の1つ。日常生活の中からユーザーのニーズや課題を発見し、事業・サービスのコンセプトを練り上げ、アイデアを形にして提案する。1年次からその基礎を学び、体験学習などで実践。理論と実践を繰り返して、徐々にその思考を身につけていく。
企業コラボレーション総合学習	3年次	毎年1～2社の企業の協力を得て実施。生徒と社員が共同して、新しい商品やサービスを開発する。個人で考えた後、グループで議論して原案を作成。クラス内で社員も含めて評価し合い、選出されたクラス代表が学年で発表し、最優秀作を決める。企業に認められれば、実用化もされる。
起業体験プログラム	4・5年次	クラス単位で株式会社を設立し、文化祭に出す店を、企業経営と同じように運営する。企業理念の設定に始まり、代表取締役、会計、広報などの役割を決め、事業計画を立てて準備。文化祭当日の販売を経て、決算をし、株主総会を開催して会社を解散させる。
家庭科でのCBL（*2）	5年次	4～5人から成るチームごとに、身の回りの生活での問題や疑問から課題を設定し、解決策をまとめて提案。クラス発表、学年発表を経て選ばれた代表チームが、オーストラリア研修に派遣され、現地の高校生に英語でプレゼンテーションを行う。

* 学校資料を基に編集部で作成。

* プロフィールは2020年3月時点のものです。

* 2 Challenge Based Learningの略。問題解決型学習の1つの方法。解決策を立案するだけでなく、その実践までを行うプロジェクト型学習。

祭に外出する模擬店を経営する活動だ。代表取締役の選出、会計や広報などの担当決めを行い、企業理念を設定して、事業計画を作成する。出資を募るプレゼンテーションを経て、具体的な準備に入る。9月の文化祭に向けて、4月から「総合的な学習の時間」やホームルーム、夏季休業などを利用して準備を進める。

「商品や食品の単なる販売とせず、それら売る理念づくりから企業を継続させる利益の出し方までを経験させようと考え、本プログラムを始めました。そのため、企業の方には、具体的な商品知識だけでなく、企業理念などをしっかり語っていただくようにしています」(齊藤先生)

家庭科で実施するCBLでは、生徒が4〜5人のチームとなり、身の回りの問題や疑問から課題を設定し、解決策を考えて実行し、その内容を発表する(写真1)。19年度は、例えば、自分の生理痛を父親に理解してもらえなかった経験から、男性の生理痛への理解を促す活動を提案したチームが、生理に関するウェブサイトを開設。生理に関する映画の上映会も企画した。家庭科担当の丸山智子先生は、CBLの意義をこう語る。



写真1 CBLの学年代表チームの発表は、聴衆からの質問に答えながら進める対話形式とした。聴衆の生徒も、発表者に質問するなど、能動的な姿勢で参加していた。

「大学入試では課されない家庭科だからこそ、受験の先を見据え、社会の問題に目を向けられるような学習内容にしています。生徒は4年次までに探究学習を繰り返し経験しているのです、自分たちで話し合っ、調査計画を立て、問題解決に役立ち、そうな企業や団体などを探し出し、協力を依頼するというように、自立して活動を進めていきます」

対話を通じて他者を理解・尊重し、内省につなげる

同校が行う探究学習には、2つのポイントがある。1つめは、チーム間の競争だ。1年次から多くの活動をチームで行い、その成果は教師や

外部講師に評価され、順位がつけられる。例えば、CBLでは、クラス代表による学年発表を行い、学年代表に選ばれたチームは、オーストラリア研修に派遣され、現地の高校生に英語でプレゼンテーションする。

「評価の際には、評価基準を明示し、評価の過程もオープンにして、生徒に不満が残らないようにしています。順位をつけることで競争意識が生まれ、よりよいものをつくりたいと、生徒は一生懸命取り組みます。

その結果、全体的にも高いレベルの成果が得られます」(神谷副教頭)

2つめは、相互評価と自己評価の場を設けることだ。まず、発表時には、評価シートを用いて他チームの発表を評価する。活動終了時には、チーム内で相互評価をし、相手に伝え合う場を設けている(写真2)。そうした過程があるからこそ、生徒は、評価の順位も納得することができ。そして、個々の特徴やよさを認め合い、相手を尊重することで、自分も頑張ろうと意欲を高めていく。

「多くの生徒が自分の意見をはっきり言うので、意見がぶつかることもありますが、もめごとが起きて自分たちの力で解決します。1年次

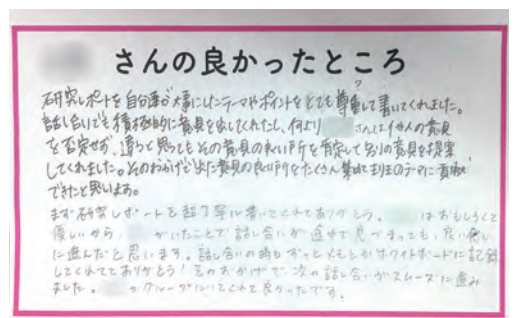


写真2 相互評価シートを活用し、生徒が互いによい点を伝え合うことで、一人ひとりの特徴を認め合う場とするとともに、自分のよさを客観的に認識できるようにしている。

から様々な生徒との協働を通して、互いが納得する答えを出す方法を体得していくからでしょう」(丸山先生)

自己評価では、チームでの役割や貢献度、活動を通じた自身の変化、チームに不足していたものとその解決方法などを言語化する(図2)。

「活動の度に自己評価を行うことで、チームや自分の問題とそれに対してとったアクションを内省し、次の学びに生かそうとする姿勢が身についていきます。他者との協働や自己の内省があるからこそ、他者のことまでもよく考えて、自分の生き方を選べる人になれるのだと思います」(丸山先生)

図2 CBLの「自己評価シート」、生徒の記述内容

自己評価シート

CBLに取り組んできた中で、自分がどのようにグループでの活動に関わってきたか振り返りに取り組む。CBLでの自分自身の活動、チームへの貢献度を5段階で評価をつけ、その理由をそれぞれ書いてください。

*調査の中で、あなたが関わっていないもの、用として実施していない項目に関しては、0を入力してください。

1) チームを決める際に、他にどのような貢献ができましたか？

2) 調査・研究を計画通りの日程で進めるため、どのような貢献ができましたか？

3) 一次情報を収集する際、あなたがどのような貢献ができましたか？理由の欄には、自分ができたことを記入してください。

4) グループ内のコミュニケーションを円滑にしたり、協力して活動を進めていくために、どのような貢献ができましたか？

5) 解決策の実現に向けて、あなたが何をしましたか？いつ、どのような手段で、実際に何に向けてアクションを起こしましたか？

6) あなたは僕の仕事をとしてどのようなことを行いましたが、僕？

7) CBLを通して、あなたの進路の考えや中心に何か変化はありましたか？ある場合は、どのような変化があったかを教えてください。

8) あなたも自分の好きな研究のテーマをポイントを教えてください。

生徒の振り返り (抜粋)

- ◎自ら行動して外部から情報を得ることや、解決策をすぐ考えるのではなく、課題についてよく知ることが重要だと気がついた。結果ではなく、プロセスを重視するようになった。
- ◎今回初めてリーダーを務めたことは、私にとって大きな挑戦だった。よいリーダーとは、他者に高圧的で、それでもよい仕事をするので、メンバーについてこさせるとか思っていた。しかし、自分がリーダーを経験して、よいリーダーとは、メンバーが楽しく役割を果たせるようにすることができる人だと分かった。
- ◎話し合いがうまくいかない時には、一度話を整理し、「自分たちが今、一番優先して行くべきこと」を再確認した。何も考えが浮かばなければ、雑談などをしたり、飲み物を飲んだりして、頭が柔らかくなるようにした。メンバー間で意見が食い違った時は、自分がまず相手の主張を最後まで聴き、それを受け入れてから、自分の意見を言うようにした。

* 学校資料を基に編集部で作成。

「28project」の集大成として、28歳時に、同級生と当時の担任が集う「ホームカミングデー」が開かれる。起業して自分の会社を持った卒業生、海外でボランティア活動をする卒業生、子連れで参加する卒業生など、自分が思い描いた分野で活躍する卒業生たち

ど、自分の人生をしつかり歩む卒業生の姿に、教師は「28project」の意義を実感する。「社会とのかかわりを大切にし、自分のよさを他者のために役立てようとする卒業生が多いと感じています」(神谷副教頭)「企業コラボレーション総合学習」など、連携企業として勤務先との間

卒業生の声

自分の土台を築いた中高6年間



63期生 生徒会長
(株)ベネッセコーポレーション勤務 小川 舞さん

振り返ると、中高6年間の様々な経験が、今の私の土台を築いたのだと思います。

中学1年次からチームでの活動がたくさんあり、メンバーは活動ごとに異なりました。いろいろな人と目標に向けて必要な議論をする中で、個の違いを肯定的に捉えられるようになり、先入観なく物事を見る姿勢が身につきました。違いを認め、受け入れる寛容さは、生徒にも先生にもありました。私が入学時には考えてもいなかった生徒会長に挑戦できたのは、何があっても仲間や先生が応援してくれるという安心感があったからだと思います。

企業へのプレゼンテーションでは、一生懸命考えた提案でも通らないこともあり、挫折も味わいました。ただ、何度も経験するうちに堂々と発表できるようになり、社会人になった今、100人以上を前にした生徒講演や研究会でも、自分の言葉で伝えることができていると感じます。

2020年は、中学入学時から先生方に「1つのゴール」と言われた28歳になります。在籍時に思い描いた自分になれているのか。ホームカミングデーで同級生に会い、確かめたいと思います。

を取り持つ卒業生も出てきた。「在籍時の満足度が高く、在校生の役に立ちたいと協力を申し出る卒業生が多いことは、本校の強みです。『28project』の意義を勤務先に説明してくれるなど、よい循環ができています」(斉藤先生)卒業後の進学先は、特定の学部・学科に偏っていないのが特徴だ。6年次には、大半の生徒が明確な希望進路の下に志望校選択をしている。「例えば、企業経営を学びたいからといって、経済・経営・商学科をひとくくりを考えず、各学科の内容を

しつかり調べてから志望校を決めています。多くの生徒が第1志望にこだわり、大学入試に挑戦しています」今後の課題は、生徒個々の力をより高めることだ。現在の探究学習を1〜3年次で行い、CBLで個人のプロジェクトを加えることなどを検討していると、神谷副教頭は語る。「チームで自立した活動をする生徒を見ていると、個人の突出した力を育むことも必要だと考えています。生徒が、自分のあり方や生き方によりつなげる課題に取り組めるよう、プログラムを改編する予定です」

愛知県立東海商業高校

多様な資質・能力を身につけることで、自信を持たせ、自分らしく社会で活躍し続けられる人材を育成する

愛知県立東海商業高校は、社会の変化や生徒の進路の多様化に伴い、近年、教育活動の改善に取り組んでいる。社会で求められる資質・能力を身につける中で、個々のよさを発揮させて自信をつけ、長所を伸ばす指導を重視することで、卒業後に自分らしく、社会で活躍し続けられる人材の育成を目指している。

社会で必要な力を育む中で自分の強みに気づかせる

愛知県立東海商業高校は、2020年度に創立50周年を迎える、県下で最も新しい単独商業高校だ。卒業後に就職する生徒が多いため、社会を生きていく上で必要な心構えやスキルを育むよう、力を入れてきた。佐藤裕子校長は、「商業教育は、『人づくりの教育』だ」と語る。

「商業教育は社会に直結した教育です。本校では、挨拶の習慣や礼儀作法、マナーを身につけさせるだけでなく、自己のあり方や生き方を問ひかけ、考えさせる指導を大切にしてきました」

近年、同校の生徒の進路は多様化しており、90年度は就職90%、4年制大学進学1%だったのに対し、19年度はそれぞれ64%、16%と大きく状況が変わった。以前は、入学時から高校卒業後に就職することを希望している生徒が大半だったが、今では、進学と就職のどちらにするか迷って同校を選ぶ生徒が多く見られるようになった。

そうした変化に伴い、進路指導も様変わりした。以前は、安定した企業から内定を得るための指導が主流だったが、近年は、自身の適性、自分が望む人生のあり方や生き方をじっくり考えさせながら、社会で求められる資質・能力を身につけ、最

最終的に自分に合った進路を実現させる指導に力を注ぐ。小川浩司教頭は次のように説明する。

「進学、就職にかかわらず土台となる基礎学力とともに、経済産業省が定義した『社会人基礎力』を高める指導に力を入れています。同時に、生徒に自身の特性や強みを発見・再確認させ、自分らしい生き方を見つけて、卒業後も活躍し続けられる人材の育成を目指しています」

「社会人基礎力」や文部科学省の「基礎的・汎用的能力」を基に整理した14項目について、各学年で年2回、自己評価させる生徒アンケートを16年度より実施している(図1)。

「1年生は希望を抱いて入学する

ため、全体的に数値が高いのですが、2年生は高校生活の中で課題に直面して低評価となります。そうした期間には、生徒の意欲を高める指導や働きかけをしっかりと行います。すると、3年次には、高い自己評価をつけ、卒業していく生徒が多く見られます」(小川教頭)

生徒アンケートで把握した課題を基に、指導を検討

同アンケートを始めてから、教師は生徒の実態をよりの確に把握できるようになった。1学年担任の戸田和佳代先生は、次のように述べる。

「教師が感じていた生徒の強みや

 友澤恒平 <small>ともざわ へい</small> 進路指導部 教職歴10年。同校に赴任して3年目。情報科。	 戸田和佳代 <small>とだ わかよ</small> 1学年担任 教職歴13年。同校に赴任して10年目。商業科。	 中村普章 <small>なかむら ひろのり</small> 1学年主任 教職歴10年。同校に赴任して7年目。数学科。	 新美廣勝 <small>にいみ ひろかつ</small> 進路指導主事 教職歴28年。同校に赴任して5年目。商業科。	 小川浩司 <small>おがわ こうじ</small> 教頭 教職歴31年。同校に赴任して4年目。	 佐藤裕子 <small>さとう ひろこ</small> 校長 教職歴34年。同校に赴任して1年目。
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

課題が目に見える数字で表れたことで、課題を克服したり、強みをさらに伸ばしたりする取り組みを検討しやすくなりました」

19年度の1年生は、入学当初、「課題対応能力」の低さが課題だったため、学年団で検討した結果、夏季休

愛知県立東海商業高校

- ◎校訓「聡慧・健」の下、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を高め、社会貢献できる人材を育成。地域貢献活動に積極的で、生徒が「課題研究」で考案したキャラクターは、「東海市まちづくり応援大使」として市民に親しまれている。
- ◎設立 1971（昭和46）年
- ◎形態 全日制／総合ビジネス科・情報科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2019年度進路実績（現役のみ） 国立大は、青森公立大、北九州市立大に2人が合格。私立大は、愛知学院大、愛知大、南山大などに43人が合格。短大、専門学校進学56人。就職182人。
- ◎URL <https://tokai-ch.ac/hi-c.ed.jp/>

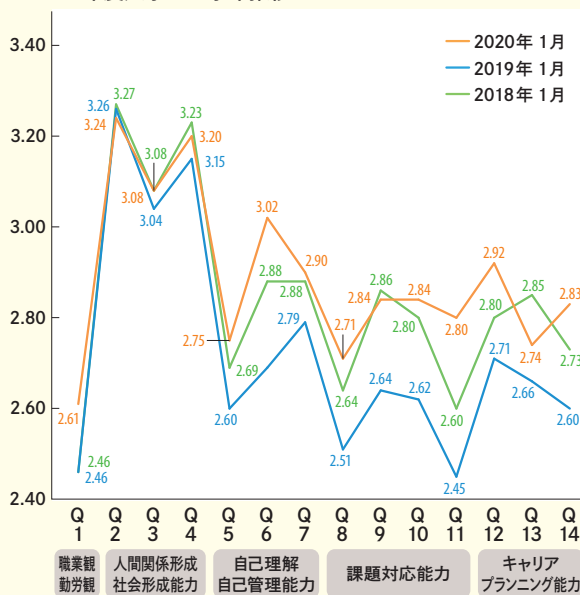
業中に「テーマ別探究」に取り組みせることにした。SNSの恩恵や危険、AIが人生に与える影響、ラグビー日本代表の躍進の理由、マイクロプラスチックゴミの問題、世界の難民問題など、教師が設定した20のテーマの中から、「自分に足りないこと」「自分にさらにプラスになること」などの観点で1つを選んだ上で、そのテーマについて書籍やインターネットで調べて、分かったことや自分の意見をまとめさせた。

「二見すると、うまくまとまっているのですが、あたり障りのない内容が多く、意見や感想に自分らしさが見られないことが課題と感じまし

図1 2017年度入学生の生徒アンケート結果（3年間推移）

同校では、経済産業省の「社会人基礎力」や文部科学省の「基礎的・汎用的能力」を踏まえて、育成を目指す資質・能力を設定し、全学年の生徒にその獲得状況を自己評価させるアンケート調査を実施している。過去数年間の調査結果から、周囲の人との関係を大切にしながら物事に取り組む力は高いが、指示されずに行動する力や、苦手なことに進んで取り組む力が弱いことが分かってきた。そうした生徒把握が、同校の3年間の指導の裏づけになっている。

2017年度入学生 学年推移



* 学校資料を基に編集部で作成。

職業観	Q1	働くことに対して不安や緊張感はなく、社会に出ることを楽しみにしている
人間関係形成 社会形成能力	Q2	相手の考えや意見を聴き、理解しようとしている
	Q3	自分の考えや気持ちを整理して伝えようとしている
	Q4	周囲の人と力を合わせて行動しようとしている
	Q5	指示されたことだけでなく、自分で考えて行動できる
自己理解 自己管理能力	Q6	自分の興味や関心、長所や短所などについて自分で分かっている
	Q7	自分の感情に流されず、規則を守り、何事も取り組むようにしている
課題対応能力	Q8	苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組むようにしている
	Q9	調べたいことがある時、自ら進んで資料や情報を集めるようにしている
	Q10	解決する問題や課題があった時、原因を考え、解決方法を工夫している
	Q11	計画的に物事を進めたり、改善を加えて実行したりしている
キャリア プランニング能力	Q12	学ぶことや働くことの意味について理解するようにしている
	Q13	学校での勉強と自分の将来をつなげて考えるようにしている
	Q14	自分の将来について目標を立て、その実現のための方法を考えている

た。各自のまとめは教室に掲示し、ほかの生徒と比較できるようにすることで、自分の課題に気づけるよう

にしました」（戸田先生）
自分らしい考えを生み出し、それを表現する力を高めるために、2学

* プロフィールは2020年3月時点のものです。

期以降はクラスメートの前で発表する機会を多く設定した。さらに、2年次の夏季休業中などにも同様の探究学習に取り組ませる考えだ。

生徒アンケートの自己評価結果は、学年共通の取り組みにとどまらず、教科学習や特別活動などにおける教師の指導にも生かされている。例えば、1学年主任の中村普章先生は、生徒の主体性に課題が見られたため、部活動の指導を見直した。

「生徒自身に練習メニューを考えさせたり、試合後の振り返りで課題を見つけさせたりするなど、自分たちで考えて活動の質を高めていくプロセスを取り入れました」

模擬社会を運営する活動で 社会で活躍する自分をイメージ

社会への理解を深め、自分の生き方を考える機会となるのが、2年次のインターンシップだ。

「インターンシップでの経験や気づきは、クラス内で発表します。発表では、『こんな勉強をしたい』『日常生活でも頑張りたい』といった前向きな言葉が多く聞かれ、そうした生徒の姿からほかの生徒が刺激を受



写真 教室に模擬的な市場をつくり、実践的・体験的学習を通じて、経営活動を主体的・合理的に行う能力と態度を育成する。

ける様子も見られます」（戸田先生）

社会で自分がどのように活躍するのかをイメージする場となるのが、3年次の「総合実践」だ。生徒はグループをつくって製造、小売、卸売などの模擬株式会社を設立し、1年間を通して会社経営を行い、最後に決算書を作成する（写真）。簿記を始めたとした商業科目の広範な知識が必要になるだけでなく、自分がするべきことを考えた上でグループのメンバーと円滑にコミュニケーションをとったり、他社と交渉したり、自社の問題を解決したりと、まさに社会で活躍するために求められる様々な力が磨かれていく。活動が停滞しているグループに対しては、教師が「次に何をしたらよいと思う？」

と、生徒自身で考えることを促す。

「多くの生徒が自分にできることを考える中で、自分の強みを自覚するだけではなく、知識やスキルの不足に気づき、『もっと勉強しよう』という気持ちになります」（戸田先生）

3年次の1年間を通して全生徒が取り組む「課題研究」も、生徒がグループで協働して課題に取り組む体験的な学びだ。「観光と地域資源活用」「ファイナンス講座」「商品開発」と英語でのプレゼンテーションなど、19講座が開設され、地域社会と密接にかかわりながら活動を進める。最終的にグループごとにプレゼンテーションを行い、選ばれたグループは、行政や企業の関係者などを招いた場で成果を発表する。

「課題研究」は「人づくりの教育」の集大成と言えます。大きな課題に取り組み、その結果を発表する過程で、生徒は教師の想定を超える成長を見せてくれます」（佐藤校長）

自分らしく活躍できるように 生徒のよさを見つけ、発揮させる

多様な活動に生徒が取り組んでいく同校だが、自分らしく、主体的に

活動するためには、自尊心や自信が欠かせない。だが、進路指導主事の新美廣勝先生は、入学時に自分に自信を持っていない生徒が少なくないと感じているという。

「本校は、中学校時代の成績が中間層の生徒が集まっていますから、一人ひとりのよさを丁寧に見つけて褒めていけば、生徒は自信を持ち、学校も好きになります。そのため、学年を問わず、生徒の長所を見つけ、発揮させる方針としています」

例えば、学年ごとに室長の生徒が集まる「室長会議」を定期的の実施しているが、そこで大切にしているのは、室長が自分のクラスの近況報告をする際に、よいところを中心に語るといったことだ。そうした配慮は、担任が生徒に係や委員会などの役割を持たせる際にも見られる。

「カメラが趣味の生徒にクラスの記録係を任せたと、年間を通して主体的に動いてくれました。また、絵を描くことが好きな生徒にクラス旗の制作を担当してもらうなど、生徒の得意分野を生かせる役割を与えて、達成感を味わわせるようにしています」（中村先生）

簿記や情報処理検定などの資格・

検定試験対策の学習を通じた成長も生徒の自信になっている。

「合格を勝ち得る成功体験は、その後の学びの大きな動機づけになります。ただ、結果以上に大切なのが、自分で計画を立てて学んだり、失敗から再起したりといった経験です。そこで生徒は、将来につながる成長を見せます」（佐藤校長）

同じ資格取得や検定合格を目指す生徒はグループで学習に取り組み、励まし合う中で一体感が高まり、協働して1つのゴールに向かっていく力も身につけていく。

生徒が自分を客観視するために 多面的な評価をカルテ化

社会とのかかわりを考えながら自身の強みをメタ認知させる3年間の指導が、進路実現の素地となる。同校の進路指導は「進路一斉指導」「進路個別面談」「進路ガイダンス」の3本柱で構成されている。2年生10月、および3年生4月にそれらを実施し、3年生5月以降の面接指導につなげて、一人ひとりの最適な進路実現を図る（図2）。

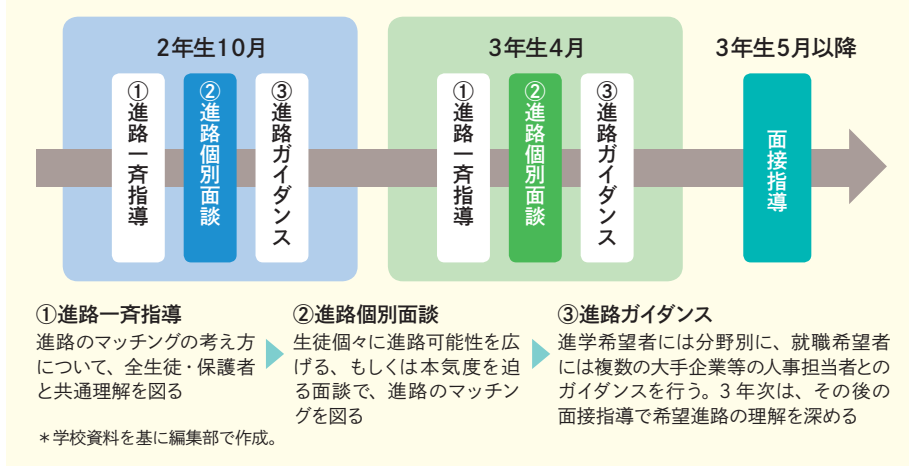
進路一斉指導では、それまでの

希望はいったん白紙に戻すように生徒に伝え、多様な進路先を提示した上で、進路先が求める人材像、高卒就職と大学進学へのメリット・デメリットなど、生徒と保護者に共通の情報を提供して「目線合わせ」を行う。次のステップである進路個別面談では、できるだけ進路可能性を広げる方向で、生徒の話聞く。そして、進路ガイダンスでは、進学・就職に分かれ、それぞれ外部講師の話聞くことなどを通じて、希望進路の理解を深めさせる。

「3本柱のサイクルを2度回す中で、生徒の希望を聞きながら、『どう生きていきたいのか』といった人生観を語らせ、具体的な進路に結びつけていきます」（新美先生）

生徒個々の多様な資質・能力を見取る多面的な評価の結果を、個別にカルテ化するシステムづくりも始まっている。運用にあたっては、学校独自のアンケートや外部アセスメントの活用を考えていると、進路指導部の友澤恒平先生は構想を語る。

図2 2年生秋からの進路指導の流れ



「公開する情報を生徒用と教師用とに分けた上で、双方がいつでも見られる状態にします。多角的なデータや情報を一覧化することで、生徒は自分を客観視しやすくなりますし、すべての教師が同じ情報を共有した上で1人の生徒を指導できる利点もあります。20年度の3年生から、

実際にデータを蓄積してカルテ作成に取り組む予定です」

生徒の今後の人生を見据えた時、多くの教師が感じているのが、失敗経験の必要性だ。戸田先生は日直日誌に、「幸せとは何か」というテーマで生徒全員に記述してもらったことがある。

「生徒の8割は『今が十分に幸せ』と書きました。それはよいことかもしれないませんが、現状に満足せず、挑戦し続け、苦労や失敗を経験することで、幸せの輪郭がもつとはつきりしてくるのではないのでしょうか」（戸田先生）

本来、学校は失敗が許される場所であるはずだ。自尊心や自信を持った生徒が自分の可能性に気づき、積極的に挑戦して価値ある失敗を経験できるような指導体制を構築したいと、同校の教師は考える。

「ここ数年、教師自身が指導改善のチャレンジを続けてきました。その姿勢から感じるものがあつたのか、生徒たちも少しずつチャレンジする姿勢を見せ始めています。これからも教師や学校が挑戦し続けることで、生徒に失敗する勇気を与えていきたいと思っています」（小川教頭）

Interview
インタビュー

自己の「あり方・生き方」を 考えることは、 自分と周囲を幸せに することにつながる

慶應義塾大学大学院
システムデザイン・マネジメント研究科 教授

前野隆司



まえの・たかし 東京工業大学大学院修士課程修了。キヤノン株式会社に勤務後、慶應義塾大学理工学部教授、ハーバード大学客員教授などを経て、2008年より慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント(SDM)研究科教授。2011年より同研究科委員長兼任。著書に『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』(講談社)、『幸福学』が明らかにした 幸せな人生を送る子どもの育て方』(ディスカヴァー・トゥエンティワン) など多数。

人は地位財だけでは 幸福を維持できない

幸福学は、英語では Wellbeing study と言います。つまり、幸福学とは、「よいあり方」について研究する学問であり、幸福とは、「よいあり方」を実現できている状態であると言えます。では、どういう状態の時に、人は「よいあり方・生き方」を実現できるのでしょうか。

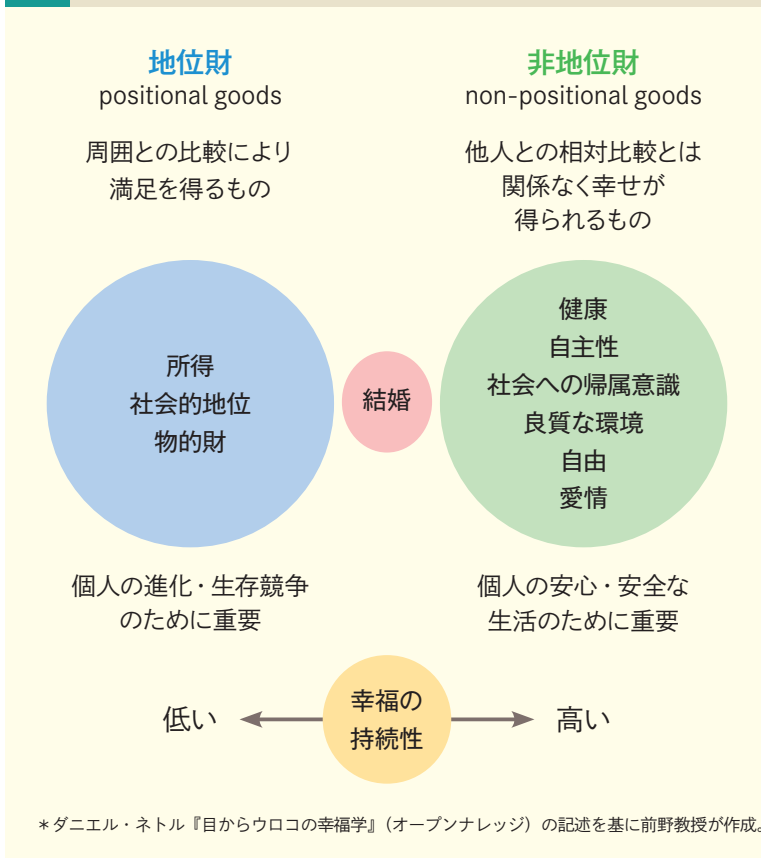
新学習指導要領にも示されている、生徒が「自己の在り方生き方を考える」ことは、ここまでの2校の実践事例にも見られた通り、生徒自身の進路を方向づける上で重要であり、それらを考える中で生徒は、他者や社会を意識したり、自分のよさや可能性に気づいたりする。そうしたことから、自己の「あり方・生き方」を考えることは、経済が成熟した現代においては、一人ひとりの幸福度を高めることにもつながるようだ。ロボットや人工知能の開発者を経て、「人はどうすれば幸せになるのか」を分野横断的に追求する幸福学の研究者となった、慶應義塾大学大学院の前野隆司教授に話を聞いた。

収入や地位、財産が増えるほど、人は幸せになるのでしょうか。実は、そうではありません。

経済学に「地位財」と「非地位財」という用語があります(図1)。地位財とは、所得や社会的地位、物的財など、人と比べることが可能なものを指し、一方、非地位財とは、健康や社会への帰属意識、愛情など、人と比べることができないものを指します。非地位財を手に入れた時に得られる幸福は長続きするのに対して、地位財による幸福は長続きしないという特徴があります。例えば、人は収入が増えるとその時はうれしいのですが、すぐにもっと増えてほしいと思うようになり、現状に不満を抱き始めます。ですから、持続的な幸福を得るためには、地位財ではなく、非地位財を追求することが必

*プロフィールは2020年3月時点のものです。

図1 地位財と非地位財



要なのです。
ただし、高度経済成長期は、地位財によってでも幸福を持続させることが可能でした。当時の人々は現代ほど物質的に豊かではなかったですが、収入が少しでも上がったたり、新しいモノを手に入れたりすること、生活の安定に直結しました。また、白黒テレビを手に入れたら次は電気洗濯機、その次は電気冷蔵庫というように、次々と世の中に新しい

地位財が供給されていきましたから、それを追い続けることで幸福を持続させることが可能でした。「頑張つて勉強して大学に進学し、企業に入社することができれば、収入や社会的地位を得られて幸せな人生が待っている」というストーリーが、リアリティーのある時代だったのです。しかし、現代は経済が成熟してしまっていますから、今よりもさらに多くの地位財を手に入れ続けるの

は、ほとんどの人にとって困難です。また、現代ほど物質的に豊かではなかった時とは違って、生活水準がある程度達すると、収入が上がったり、新しいモノが入ったり、新しいモノが入ったりしても、それほど大きな喜びを感じられなくなるものです。



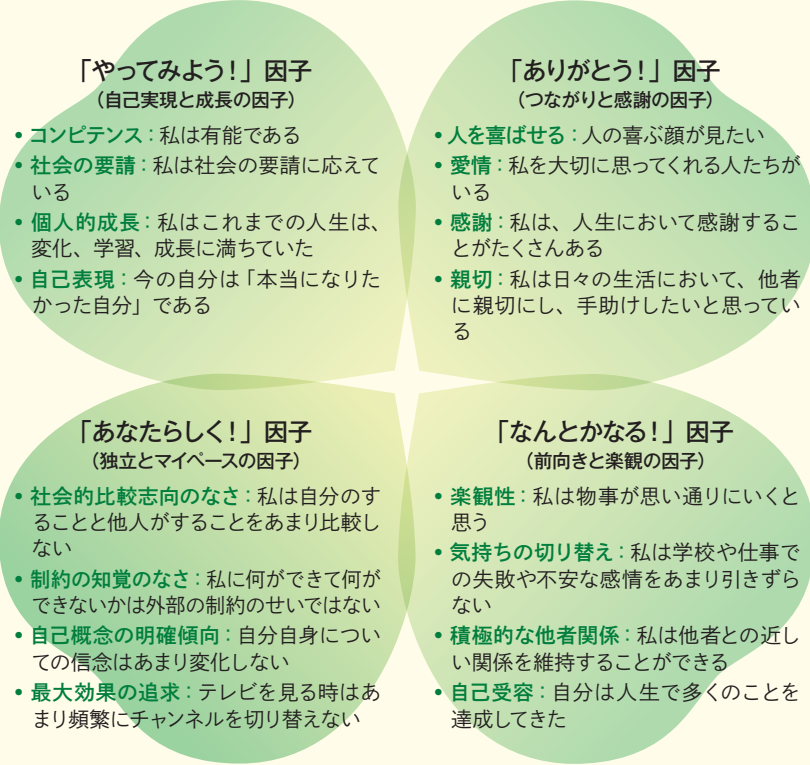
最近の若者は、就職先を、会社の規模や収入よりも、居心地のよさや働く楽しさを重視して選ぶと言われています。ようやく人々の意識が、地位財から非地位財へと向かい始めているということかもしれません。

「あなたらしく！」が必要とされている時代

私は以前、1500人にアンケート調査を行い、どんな心的傾向の人が幸せなのかを因子分析したことがあります（P.18 図2）。その結果、幸福度が最も高い人は、「やってみよう！」因子（自己実現と成長の因子）、「ありがとう！」因子（つながりと感謝の因子）、「なんとかなる！」

因子（前向きと楽観の因子）、「あなたらしく！」因子（独立とマイペーアの因子）の4つを全部満たしている人であることが分かりました。ですから、生徒に「よいあり方・生き方」を実現できる人物になってほしいのなら、この4つの因子を満たす必要があります。

私は、4因子の中でも、「あなたらしく！」因子を満たしていることが、今後はとりわけ重要になってくると考えています。既に、その人ならではの強い個性や独自の発想力を持っている人たちが互いにつながり合い、世界中で次々とイノベーションが生まれている時代です。「あなたらしく！」をしっかりと満たしている人は、幸せな人生を築け、また、社



*前野隆司『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』（講談社）を基に編集部で作成。

会からも求められているわけです。ところが日本人は、他者と自分を比べたり、他者に同調したりする傾向が強いですから、「あなたらしく！」生きることを苦手としています。ちなみに、幸福に関する研究はアメリカでも行われていますが、アメリカでは、幸福度が高い人の条件

に「自分らしく生きていく」ことは挙げられていません。アメリカ人にとって自分らしくありのままに生きることは、あまりにも自明であるため、わざわざ幸福の条件には挙げないのです。では、生徒の「あなたらしく！」因子を充実させるにはどうすればよ

いのか。私はまず、教師自身が「あなたらしく！」因子を満たすことだと思っています。「あなたらしく！」生きられない教師が、「あなたらしく！」生きる生徒を育てられるはずはないからです。

一番のお勧めは、アメリカを始めとした「あなたらしく！」生きていく人が多い国を訪ね、そういう「あり方・生き方」がどういうものなのかを体験してみることです。また、国内にも「あなたらしく！」生きていく人はいますから、そうした人と会って話す機会を多く設けることも有効でしょう。これまで「周りがそうしているから自分も」といった判断基準で生きてきた人が、「自分は本来はどうありたいのか」「どう生きたいのか」を考えて、実践するのは難しいことですが、それができるようになると、その人自身も生きるのが楽になり、幸福になります。

対話を通じて他者を理解・尊重し、つながっていく

「あなたらしく！」因子とともに、これからの社会を生きる人に満たしてほしいと思うのが、「ありがとう！」

う！」因子です。「ありがとう！」因子とは、他者を理解して、敬意を抱き、他者をつながる力と言ってもよいでしょう。

どんなに「あなたらしく！」因子を満たしていたとしても、それが独り善がりのものであっても、他者や社会から認められず、また、他者や社会に影響を及ぼすこともできません。そうした「あり方・生き方」は、あまり幸福とは言えないでしょう。

まず、自分の「あなたらしく！」を確立した上で、相手の「あなたらしく！」についてもよく理解し、それを認め、応援したいという思いを持つ。そして、お互いの強みや興味・関心を持ち合わせたら何ができるのかを考え、それに取り組む。目標が達成できた時にはともに喜び合い、相手の協力に感謝する。このように、「あなたらしく」「ありがとう」と感じ、「なんとかなる」と「やってみる」人が幸福なのです。

相手の「あなたらしく！」を理解し、互いに認め合うようになるためには、対話が大切です。その際に参考になるのが、経営における対話の重要性を研究しているウィリアム・アイザックスが提示している「ダイ

アローグの4行動」という概念です。それは、まずこちらの意見を押しつけない、相手の話を聞くこと (listening)。その際に、相手の意見や考えにも、きつと何かしらの正当性があるはずだと考えて耳を傾け、尊重すること (respecting)。また、自分の意見のよりどころとなっていない前提や確信をいったん横に置き、判断を保留すること (suspending)。そうして、相手の話をしっかりと聞いた上で、自分の考えを声に出す (voicing)。その時にはありのままの自分の本心を語る。

その「聞く」「尊重する」「保留する」「声にする」の4行動を実践できれば、相手の言葉を深く受け止めながら、自分の意見や考えを語ることもできます。相手の意見や考えが自分の価値観と違って、「この人は、こういう理由や経験に基づいて、この意見や考えに至ったのだ」と他者を認められるようになります。

日々の対話が生徒の「あり方・生き方」を高める

そうした対話を促すために、教師が対話の価値を理解した上で、生徒

と日々対話することが重要です。生徒は、「こういう対話って、お互いを認め合えて心地よいな」と感じ、教師をモデルにして、対話の本質を体得していくはずで。

自己を見つめ、「よいあり方・生き方」を築く力は、何かの知識を習得すれば身につくものではありませんし、1、2コマの授業だけで身につくものでもありません。事あるごとに他者との対話を通して「自分はどうかありたいのか、生きていきたいのか」を考え、多くの経験を積む中でこそ高められるものです。

私も含めた教師に求められるのは、どれだけ学生や生徒にそういった機会を与えられるかということだと思います。もちろん、教育の現場では、常に対話ばかりしているわけにはいきません。私も大学教員ですからよく分かりますが、知識を伝え、習得させる場面も必要です。状況に応じて、「今は対話の場面だ」「今は伝える場面だ」と使い分ける必要があります。

対話の場面としては、授業中のちよつとした時に、今日の自分たちが学んだことが、社会的にはどんな意味があるのか、自分のあり方や生



他者の言葉を深く受け止めながら、「あなたらしく！」を、教師と生徒がともに磨いてほしい

前野隆司

き方にかかわってくるのかを、学生や生徒自身に考えさせるような言葉を発する。あるいは教師自身の「あり方・生き方」を、過去の失敗談も含めて学生や生徒に話す。そうした取り組みの蓄積が重要だと思えます。特に、過去の失敗が未来につながった価値ある経験を教師が話すことは、生徒の「やってみよう！」「なんとかなる！」因子を含め、すべての因子を満たすことにつながる

でしょう。「先生のおかげで人生観が変わりました」と言ってもらえた時は、学生が取り組んでいる研究が成功した時以上に、教員をしていてうれいと思う瞬間です。もし私たち教師がかかわったことで、学生や生徒の「あり方・生き方」をよりよい方向へと高めることができたのであれば、それは教師冥利に尽きることなのではないでしょうか。

岩手県立高田高校たかた「T×ACTION」と「未来創造プロジェクト」

復興する地域とともに考える 「幸せに生きる力」

岩手県立高田高校は、2011年3月11日に発生した東日本大震災津波で校舎が全壊、仮校舎での4年間を経て、15年4月に新校舎に移転した。以来、「普通の学校」に戻ることを重視してきた同校だが、現在は、生徒に必要な教育を地域とともに問い直し、新たな挑戦を始めている。生徒が幸せに生きるために学校には何ができるのか——復興の地で模索する教師たちを訪ねた。

震災から9年 変化する生徒の気質

子どもたちがずっと幸せであること——それは大人たちの共通の願いだ。まして、東日本大震災のような大災害を、生徒、児童とともに生き抜いてきた教師であれば、その思いはなおさらだ。岩手県立高田高校の教師たちが学校改革の重点事項として「総合的な学習探究の時間」（以下、「総合学習」）の充実に取り組むのも、「これ以上ないほどの苦労を経験してきた生徒たちだからこそ、これ以上ないほど幸せになってほしい」という願いによるものだ。

それまでも同校は、地域の復興と発展の担い手を育てるため、復興の現状と課題を調べるな

どの活動を、それぞれの学年団の工夫の下、「総合学習」で実施してきた。だが、そうした活動を積み重ねる中で、教師たちは生徒の変化を感じてようになっていた。かつて、同校の生徒を始め、震災を経験した中学生、高校生は、被災地の復興を自分たちが牽引するという自覚を持って進路選択をし、また、国内外で災害が発生した際には率先して支援活動を始める生徒が少なくなかった。だが、震災時に小学生だった生徒が入学するようになった頃から、生徒の気質に少しずつ変化が見られるようになった。

「片づけなどをしてる時に、『やります』と自主的に手を貸す生徒が減っていることに、ある時気がつきました。『手伝ってくれる？』と教師が声をかけると、ハッと気がついた表情を見せ、一生懸命に動いてくれますが……。人を



左から

進路指導課 **多田昌弘** ただ・まさひろ
教職歴 11年。同校に赴任して6年目。英語科。

進路指導課 **吉田由岐恵** よしだ・ゆきえ
教職歴 24年。同校に赴任して6年目。数学科。

*プロフィールは2020年3月時点のものです。



写真1 文化祭で地域課題をテーマとしたビジネスプランを発表する生徒。「T×ACTION」では、1年次に興味のある地域課題を設定、調査・分析し、2年次にビジネスプランの発表に向けての準備を行う。生徒は、校外のビジネスプランコンテストにも積極的に参加する。3年次には、それまでの経験を希望進路と結びつけながら、志望理由書の作成や資格試験対策に取り組んでいく。

助けたい、人の役に立ちたいという気持ちはあるものの、それが主体的・自主的な行動として表れない生徒が増えたような気がします」(吉田由岐恵先生)

さらに、3年生になっても希望進路が未決定の生徒も目立つようになり、希望進路があっても志望理由の内容が乏しいケースが少なくなかった。教師たちは、「いつの間にか、子どもたちは受け身で待つことに慣れてしまったのではないか」という思いを持つようになった。

「被災地の学校には、全国から様々な方が講演などで訪れてくださいます。それは生徒にとっては素晴らしい経験です。一方で、そうした特別な経験は系統立った活動になりにくいのも事実で、私たちはどこかもどかしさも感じていました」(多田昌弘先生)

変化の激しい社会においても夢を描いて一歩

を踏み出し、主体的に行動できる生徒を育てたい。そのために、「総合学習」を体系立った学びの場にしようと、17年度、1学年副主任となった多田先生は考えた。そして、地域課題における解決策を追究しながら、生徒が進路観を醸成していくよう、「総合学習」をビジネスの視点で系統立てて展開することを1学年団に提案。2年次の文化祭でのビジネスプラン発表(写真1)を学びのゴールとした「T×ACTION(タクシオン)プロジェクト」がスタートした。「T×ACTION」は「Takata Action」の略だ。

「17年度1学年の最初の学年集会で、『この学年から、高田高校の新たな伝説が始まるよ』と、生徒の気持ちをあおりました。震災によってまだまだ多くの課題を抱えるこの地域は、起業やイノベーションのチャンスがあふれているからこそ、ビジネスの視点で問題解決を考えることに価値があると話しました」(多田先生)

地域課題を学ぶ中で
成長する生徒、教師

高校生にとって、地域課題をボランティアではなくビジネスの視点で考えることは、決して容易ではない。実際、生徒からの提案は当初、公園やサッカー場など、地域に足りないものを作ればよいといったものが多かった。1学年団の教師たちは、そうした提案に対して、「どう



左から

副校長 菅 常久 かん・つねひさ
教職歴 29年。同校に赴任して1年目。

校長 須川和紀 すかわ・かずのり
教職歴 33年。同校に赴任して2年目。

副校長 継枝 斉 つくえだ・ひとし
教職歴 32年。同校に赴任して2年目。



写真2 地元企業人や行政職員、NPO活動家などが集まった「高田高校の未来を語る会」。「生徒の強み」「高校にもっと力を入れてほしいこと」などについて話し合う中で、「高校生には、働いてお金を得ることの大切さ、大変さを知ってほしい」という声が多く寄せられた。ここでの意見に加えて、生徒、保護者、教職員へのアンケートを踏まえて、学校として生徒に育成したい資質・能力が設定された。

やって利益を出すの?」「実現性があり、持続可能なプランにするには?」と、根気強く問いかけ続けた。並行して、起業家や金融機関の融資担当者の講演を実施したり、ビジネスプランコンテストに参加したりするなど、ビジネスプラン軸に「総合学習」の1コマ1コマを再構築していった。次第に「観光客向けの足湯に、地域の特産物を販売するミニ市場を併設できないか」といったビジネスの視点が、生徒の意見に見られるようになった。

「T×ACTION」が2年目に入った18年度には、「総合学習」を学校全体の取り組みに拡充する組織として、「高田高校未来創造プロジェクトチーム」が校内に発足した。

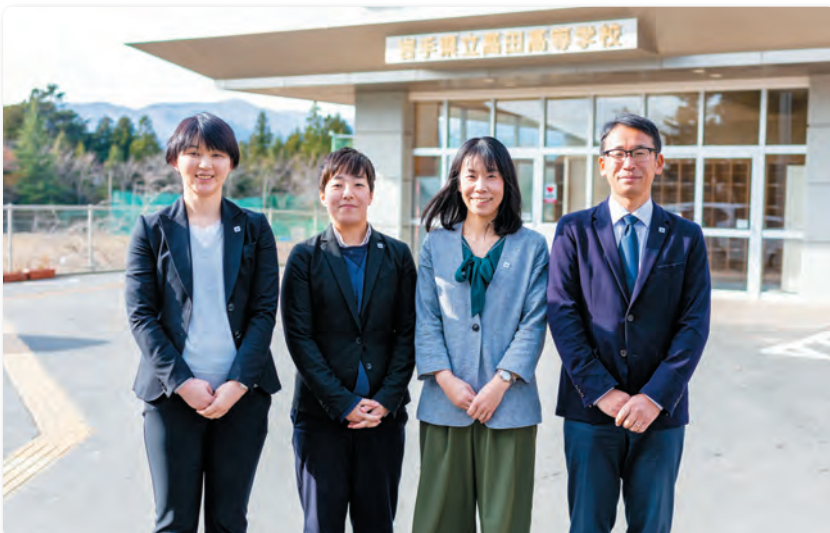
「須川校長から、『若手の先生方の柔軟な発想を大切にしながら、『総合学習』のあり方を議論してほしい』と指示を受けて、各分掌から6

人の若手の先生を『高田高校未来創造プロジェクトチーム』のメンバーに選出しました。話し合いに臨む際、『若い先生から奇抜な意見が出てても頭ごなしに否定しないようにしましょう』と自分に言い聞かせていましたが、約10回にも及んだ話し合いでは、先生方のユニークな考えに、いつも私が一番ワクワクしていたと思います」
(継枝斉副校長)

さらに須川和紀校長は、地元で活躍する経営者やNPO代表などが一堂に会して、地域の高校への思いを語る「高田高校の未来を語る会」を開催(写真2)。また、生徒、保護者、教職員にアンケートを実施し、「生徒に身につけてほしい資質・能力」の言語化に着手した。そうして、学校として新しい「総合学習」を実施しながら、そこで育成を目指す資質・能力を「主体性に基づいた計画力・実行力・発信力」と明確化し、生徒、教師が共有する学校教育目標とした。

「職員会議などで、主体性に基づいた計画力・実行力・発信力はどうすれば育成できるかを話し合う中で、『教科学習の場だけでは不十分だ』と皆が気づき、『T×ACTION』に全学年の全職員がかかわろうという機運が高まりました」(森谷幸恵先生)

「地域や保護者の思いを知ること、私たち教師の生徒への接し方が変わったと思います。教科学習や部活動だけでなく、大学や企業に足を運ぶ学校外での学びを、それまで以上に生徒に促すようになりました」(土谷桃子先生)



左から

教務情報課 **森谷幸恵** もりや・ゆきえ
教職歴 20年。同校に赴任して2年目。国語科。

教務情報課 **土谷桃子** つちや・ももこ
教職歴 9年。同校に赴任して5年目。国語科。

教務情報課 **日山 玲** ひやま・れい
教職歴 11年。同校に赴任して3年目。家庭科。

教務主任 **佐々木均** ささき・ひとし
教職歴 23年。同校に赴任して3年目。数学科。

「T×ACTION」を通じて、「将来の夢」を自ら語る生徒も次第に増えてきた。

「今、私たちが住む地域にも、外国人労働者が増えています。外国人労働者にとって、もっと働きやすい環境を考えることは、地域の発展にもつながると思います。この地域が、多文化共生の場となるような貢献の方法を今後も考えていきたいです」(3年生・千田龍汰朗さん)

「陸前高田市は漁業が盛んですが、比較的温暖な気候を生かせば農業も盛り上げられそうです。僕が考えたのは、陰生植物と陽生植物を狭量地でも同時に育成できる『2階建てビニールハウス』。将来は地方公務員になって、地域の力を生かしてみんなを幸せにする施策を考えたいと思っています」(3年生・菅原巨輝さん)

19年度3年生の文系進学クラスは、39人の生徒のうち17人が、「T×ACTION」で学んだことを大学入試で生かし、進学先を決めた。

「17人の生徒が選んだ進路は、教科学習や部活動だけでは見つけられなかったものだと思います。希望進路が明確になっていない生徒にも、面談で『君のプラン、面白かったよね』『プランが実現した時、どんな役割を担いたい?』などと、進路を掘り下げるための具体的な問いかけができるようになりました」(日山玲先生)

変化しているのは生徒だけではない。「高田高校未来創造プロジェクトチーム」の教師たちは、「T×ACTION」のあり方を話し合う中で、「仕事、家事、育児を1人でこなすワン

オペ育児の母親の息抜きと保育士を志望する生徒の保育体験を、自校の食品製造実習を活用して同時に実現する」というプランを考えたのだ。

「お母さんたちを学校に招き、パン作りを楽しんでもらう間、保育士志望の生徒が子どもの面倒を見るというプランです。19年8月に、地域の保健師、保育士の協力を得て実現しました。保育士には、生徒の志望理由書を見てアドバイザーもしてもらいました。そうした斬新なプランが若手の先生方から出たこと、そしてそれが実現したことに驚きましたが、学校の力を生かして地域課題に取り組むことも、これからの教師の役割なのだと実感しました」(菅原久副校長)

幸せに生きる力を 地域と学校がともに育む

仮校舎から本校舎に戻って3年目に始まった「T×ACTION」は、震災前の「普通の学校」の姿を取り戻そうと努力してきた同校の教師が、「これからの学校」の創造へと教育活動の方針を転換するきっかけになったと言える。

「『T×ACTION』は、私たちにとって、これからの10年間の学校のあり方を問うものだと思います。それはもちろん、震災の記憶を消し去るということではありません。本校の先輩や、教師が経験したことを生徒に伝えていくことで、『T×ACTION』に取り組む生徒は



左から

3年生 千田龍汰朗 ちだ・りゅうたろう

3年生 加藤菜々子 かとう・ななこ

3年生 菅原巨輝 すがわら・あさき

きつと地域をより深く理解してくれるはず
す」(佐々木均先生)

地域と協働して新しい学校のあり方を探究する高田高校。須川校長は、「どんな進路を希望しても、夢をかなえる力が育まれる学校をつくりたい。そのためには、すべての生徒に、自分には他者のためにできることがあることを、高校生活の中で実感させることが重要だ」と語る。

「震災発生時、本校の生徒は、自分の家族の安否も分からない中、避難してきた地域の人々のために自分に何ができるかを考え、率先して寝具を運び、薪を拾い集めました。高校生は本来そうした力を持っているのです。『T×ACTION』で地域と接する中で、自分たちができることを考え、自分の生き方を考えてもらいたいと願っています」(須川校長)

そうした須川校長の願いは、確かに生徒にも届いている。

「地域で活躍する人たちの話を聞き、情熱に触れる中で、『将来こんなことをしたい』という思いが、自分の中からたくさん出てくるようになりました。いつか自分の住む地域で起業して、小さなことからでも社会をよくしていける人になりたいです」(3年生・加藤菜々子さん)

陸前高田市の教育長として、「T×ACTION」に取り組む生徒の成長を見てきた金賢治さんは、元教師として、そして地域の1人として、高田高校生への思いをこう語る。

「あんなに大変な思いをした子どもたちだか

らこそ、予測困難なこれからの社会でもずっと幸せに生きてほしい。全国の人たちから支援を受ける中で育まれた素直さや優しさを忘れずに、自分の意見をしっかりと伝え、夢に向かって一歩を踏み出せる人に育ってほしい……それが地域みんなの願いです。『T×ACTION』は、その願いを学校と地域が一体となって実現しようとする取り組みだと思っています」(金さん)

中学校の音楽の教師だった金さんは、震災後、卒業式に臨む我が子への父母たちの思いを歌にして、生徒たちに贈った。

だからね きみは自分らしく

夢を追い きみなきやね

だからね きみは誰よりも

幸せに ならなきやね

自分らしく夢を追い、幸せに生きる。すべての教師、そして地域の願いが込められた「高田高校ならではのACTION」はこれからも続いていく。

岩手県立高田高校

◎「至誠」「錬磨」「創造」を校訓とする。2008年4月より高田高校(普通科)と広田水産高校(水産科)が統合。東日本大震災津波で校舎が全壊し、隣の大船渡市にある大船渡東高校萱中学校舎を仮校舎として4年間を送った。

◎設立 1930(昭和5)年

◎形態 全日制/普通科、海洋システム科/共学

◎生徒数 1学年約120人

◎2019年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、岩手大、岩手県立大、宮城大、首都大東京、名桜大などに11人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、東北福祉大、立教大、名古屋外国語などに延べ57人が合格。

◎URL <http://www2.iwate-ed.jp/tak-h/>



陸前高田市教育委員会 前教育長

金 賢治 きん・けんじ

岩手県内の公立中学校勤務を経て、岩手県教育委員会へ。震災後、陸前高田市教育委員会で教育次長、教育長を務め、地域の教育の復旧・復興に尽力した。

地域で生徒に育みたい資質・能力を、 学校の垣根を超えて、ともに考える

東北沿岸部教育情報交換会議

東北沿岸部の高校の教師が参加し、これからの教育のあり方を考える「東北沿岸部教育情報交換会議」が、2019年12月、ベネッセコーポレーション東北支社の主催で行われた。「T×ACTIONプロジェクト」を展開する岩手県立高田高校を始めとする東北の高校の教師たちと多彩なゲストが語り合った。

日本イノベーション教育ネットワーク（協力OECD）事務局長の小村俊平氏は、東日本大震災後、東北沿岸部の高校生が、海外の高校生

当日のプログラム

1. 講演「なぜ、東北から次世代の教育が生まれるのか」（講師：日本イノベーション教育ネットワーク（協力 OECD）事務局長 小村俊平氏）
2. 講演「沿岸部地区の教育への提言～シリコンバレーの実践から」（講師：宮城県石巻高校 高橋 就先生）
3. 意見交換「これからの生徒に求められる資質・能力」
4. 講演「これから求められる資質・能力の育成と教育実践について」（講師：東京都・私立広尾学園中学校・高校 木村健太先生）
5. 講演「T×ACTIONを通じた探究活動と進路活動の連動」（講師：岩手県立高田高校 多田昌弘先生）
6. 意見交換「求められる資質・能力を育成する教育」

と国際協働型のプロジェクト学習を展開した事例を紹介。「地域や大学と連携する探究学習に取り組む力を、生徒は持っている」と語った。

宮城県石巻高校の高橋就先生は、ベンチャー企業が集中するイノベーションの聖地・米国シリコンバレーでの幼児教育、初等中等教育などの視察報告を通じて、「手に入れた知識を実際に社会のために生かしていく体験が、生徒に主体性を育む土台となるのではないかと、社会と生徒とのつながりの重要性を説いた。

東京都・私立広尾学園中学校・高校の木村健太先生は、「大切なのは、生徒が楽しみながら学んだことが、社会貢献につながる」と、「学問を楽しむ！」をモットーにした同校の医進・サイエンスコースの探究

学習の取り組みを紹介。続いて、岩手県立高田高校の多田昌弘先生が、「T×ACTIONプロジェクト」の取り組みの紹介を通じて、ビジネスプランの立案を楽しみながら進路観を広げる生徒の様子を語った。

講演内容を踏まえた参加者の意見交換も行われた。参加者からは、「自分分は地域の中で育ったのだという感覚を、高校の学びの中で生徒にいかにか育むかが課題だ」「1校でできることには限界がある。各校で育てたい生徒像を描きながら、同じ地域の学校として一緒にできることを考えたい」「校内の教師が連携することで、各教科の専門性を生かした社会貢献のあり方を、生徒とともに模索できるはず」など、それぞれが持つ課題や展望が活発に語られた。



写真右) 東北沿岸部の高校の教師、学習支援に携わるNPO関係者などが参加。
写真中) 育みたい生徒像を学校、地域の視点で深めながら、議論が行われた。
写真左) 会の最後には、「予測不可能な課題に当事者意識を持って取り組む力を生徒が身につける」ために、高校は何ができるかという問いを共有した。

*プロフィールは2020年3月時点のものです。

「あり方・生き方」を考える対話の場を 学校につくるためにできること

東京大学大学院 総合文化研究科 教授 かじたに 梶谷真司

ここまで見てきたように、生徒に自己の「あり方・生き方」を考えさせたり、その中で求められる他者理解や相互承認を促したりする上で、大切な活動が「対話」だ。そこで、「対話」の場の1つとして注目されている「哲学対話」の実践者である東京大学大学院の梶谷真司教授に、その概要と実践のポイントについて話を聞いた。

1 答えが1つではないテーマについて 自由に語り合う「哲学対話」

編集部 梶谷教授は、中学校や高校、

企業などで、「哲学対話」を実践されていますが、まず、「哲学対話」とはどのような活動なのかを教えてください。

梶谷 哲学対話は、5〜20人程度の参加者が輪になって座り、1つのテーマについて自由に話をし、一緒に考えていく活動です。テーマは、参加者が日頃から感じている疑問、その時に話したいと思っていることなど、何でも構いません。「なぜ、戦争はなくなるのか」「なぜ、学校は必要なのか」など、答えが1

つとは限らないテーマ、問いで対話します。

哲学対話において最も大切なのは、自由に話をし、一緒に考えることです。そのためのルールとして、私はいつも次の8つを提示しています。それは、①何を言ってもよい ②人の発言を否定しない ③ただ聞くだけでもよい ④お互いに問いかける ⑤知識ではなく、経験に則して話す ⑥話を無理にまとめない ⑦意見が変わってもよい ⑧分からなくなってもよい、です。都立高校を始め、複数の高校で、放課後など



かじたに・しんじ 京都大学大学院人間・環境学研究所博士課程修了。専門は、哲学（現象学）・比較文化・医療史・哲学プラクティス。東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属の「共生のための国際哲学研究センター」のセンター長も務める。著書に『シュミッツ現象学の根本問題～身体と感情からの思索』（京都大学学術出版会）、『考えるとはということか 0歳から100歳までの哲学入門』（幻冬舎新書）など。

を利用した哲学対話を実践しています。哲学対話で、答えが1つではない問いに向き合い、自ら考え、自分なりの答えを出す力が生徒に育まれた結果、進学実績を大きく伸ばした

高校もあります。それは、教科学力の高い生徒が集まったいわゆる進学校でのことではなく、高校入試の受験偏差値の低い学校でのことです。

2 「あり方・生き方」は教わるものではなく、対話の中で自ら考え、深めていくもの

編集部 哲学対話は、生徒が自分のあり方や生き方を考え、深める点で有効な場なのでしょうか。

梶谷 生徒に限らず、大人であつても、自分のあり方や生き方を考え、それらを深めるのは、様々な経験の中で得た気づきや疑問、不安などを他者と共有する中においてではないでしょうか。だからこそ高校生には、成功者の話を聞かせること以上に、対話する時間が大切だと、私は考えています。得意教科が自分のやりたことだと思込んでしまっている学生は、東京大学でも少なくありません。様々なテーマで自由に語り合う中で、学生や生徒には自分が真に興味を持っていること、大切にしたいことに気づいてほしいです。ただし、哲学対話の場を設けたからと

いって、「とにかく話しなさい」と、生徒に対話を強制するのはマイナスです。「今は話したくない」そのテーマでは話したくない」といった生徒もいるかもしれませんが、強制されると自分の本音を語らずに取り繕ってしまう可能性もあります。話したいと思った生徒が自由に参加できる場を、校内に定期的につくっていくのが一番よいと思います。

今、「総合的な探究の時間」だけでなく、すべての教科・科目の授業で探究的な学習活動が求められています。探究型の学習では、考えたいテーマや問いを生徒が自分で設定し、他者との対話を通して考えを深めていきます。その点においても、哲学対話はいくつかの学校に広まっています。

3 すべての生徒・教師に、問いを立て、対話を楽しむ力がある

編集部 哲学対話は、どのような学校、生徒でも、すぐに実践できるものなのでしょうか。

梶谷 教科学力などの程度にかかわらず、すべての生徒が哲学対話を実践する力を持っています。しかし、最初は、どんなテーマで話し合いたいかを問うても、生徒からはすぐに意見は出てこないかもしれませんし、テーマを掲げても、発言が少ないかもしれません。それは生徒に對話する力がないからではなく、これまで教師やほかの生徒の前で自由自分の考えを語る機会が少なかったため、生徒が対話に慣れていないだけなのです。じっくりと生徒の言葉を待つうちに、生徒たちは自分の思いや考えを語り始めます。「生徒がこれだけのことを考えていたなんて！」と、驚く教師も少なくありません。

授業の中に対話を取り入れることもできます。例えば、教科書を読んだ、書かれたことに対する問いを生徒に考えさせ、さらにグループで「よい問いとそう思う理由」を語り合い、その結果を発表させるのです。時には、教師にも答えが分からない問いが飛び出すこともあるかもしれません。そんな時は、その場で教師が答えられなくても構いません。生徒と一緒に答えを考えればよいのです。むしろ、そうした教師の態度から、生徒は多くを学ぶことができます。

哲学対話の流れの一例 (50分の場合) *

・ 5～20人程度の生徒、教師が輪になって座る。

① 哲学対話の説明 (5分程度)

以下の点について、教師が説明する

- ・ 哲学対話を実施するねらいや意図 (教師としての思い)
- ・ みんなで考えたいテーマ (問い) について自由に語り合う場であること
- ・ 結論を出したり、意見をまとめたりする場ではないこと

② 問い決め (5分程度)

- ・ あらかじめ生徒に話し合いたいテーマ (問い) を複数考えてきてもらい、多数決で1つの問いに絞る

③ 対話のルールの説明 (5分)

④ 対話 (30分) ※

⑤ 振り返り (5分)

※布製の人形やクッションなど、柔らかくて持ちやすく、手元にあると安心できるようなものを1つ用意する。それを持った人が話をして、話し終わったら話を聞きたい人に渡す。今は話したくないという時は、ほかの人にそれを渡し、話したい人が手を挙げた場合は、その人に渡す。対話の促進を目的としたこのようなツールは、「コミュニティーボール」と呼ばれる。

* 梶谷真司『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』(幻冬舎新書)を基に編集部で作成。

NEXTを 語り合う ワークシート

『VIEW21』高校版
2020年4月号特集

ワークシートの使い方

できれば各自が今号の特集(P.6～27)を読んだ上で、学年団や教科団、分掌内などで本ワークシートを回し、1人ずつ考えを書き込んでいくことで、協働して本ワークシートを完成させ、お互いの考えを知る。あるいは、ワークシートを複写、またはダウンロードし、それぞれ自分のワークシートを完成させた上で集まり、語り合う。

「私らしさ」について

私たちの学校では、生徒はどのような活動で、「私らしさとは何か」について考えるだろうか。

「幸せ」について

私たちの学校では、生徒はどのような活動で、「自分にとっての幸せとはどのようなものか」について考えるだろうか。

テーマ

「あり方・生き方」を考える教育活動

生徒は、自校のどのような教育活動を通じて、自己のあり方や生き方を考えるのだろうか。今号の特集の中で出てきた、「あり方・生き方」を考えることにつながるキーワードを手がかりに、自校の教育活動について深めるツールとして、本ワークシートを活用いただきたい。



ファシリテーター役の先生へ

本ワークシートの目的は、自校に求められる「あり方・生き方」を考える教育活動とはどのようなものかを、一人ひとりの教師が考え、新しい活動を提案したり、既存の活動を改善したりするきっかけをつくることにあります。「あり方・生き方」を考える教育活動は、「このようなことをする活動」といった、唯一の答えがあるものではありません。だからこそ、それは、自校の多様な教育活動が、生徒にどのような変容をもたらしているのかを、参加者が自由に語り合えるテーマであると言えます。対話の参加者に対しては、授業やホームルーム活動などでの生徒の言動を思い出しながら、ワークシートの問いに向き合ってもらえればと思います。

「あり方・生き方」をより深く考えられるようにするために、**自校では、どのような教育活動が求められるのだろうか**

「ありがとう！」
という気持ち

私たちの学校では、生徒が感謝の気持ちを持って他者とのつながりを実感できるように、どのような配慮や工夫をしているだろうか。

「やってみよう！」
という気持ち

私たちの学校では、生徒に自己実現意欲や成長志向を醸成するために、どのような配慮や工夫をしているだろうか。

「地域」

とのかかわりの中で育つ

私たちの学校では、生徒が地域の願いや思いを感じながら成長するように、どのような配慮や工夫をしているだろうか。

「なんとかなる！」

という気持ち

私たちの学校では、生徒に前向きな気持ちを育むために、どのような配慮や工夫をしているだろうか。



カリマネの視点で描き直した グランドデザインを、 地域と連携しながら実現する

福岡県立小倉商業高校



◎「清く 明るく 健やかに」を学校のモットー、「フロンティア・スピリット」を建学の精神に掲げ、地域とともにある学校として、学校を核とした地域づくりに取り組んでいる。

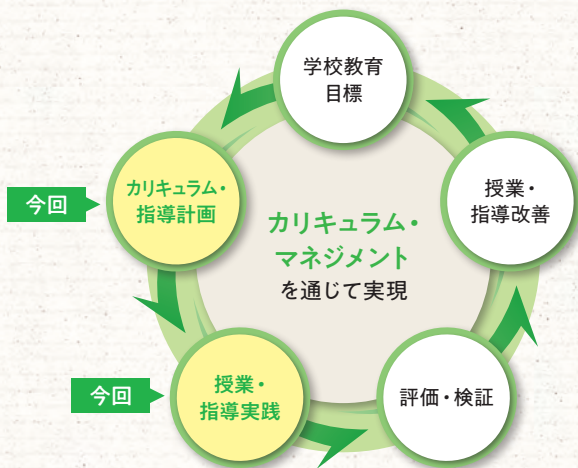
◎設立 1916(大正5)年

◎形態 全日制/総合ビジネス科、国際ビジネス科、ビジネス情報科、会計ビジネス科/共学

◎生徒数 1学年約240人

◎2019年度進路実績 国公立大は、山口大、下関市立大、北九州市立大などに8人が合格。私立大は、国士館大、日本大、九州産業大、中村学園大、福岡大などに延べ26人が合格。短大、専門学校進学64人。就職127人。

◎URL <http://kokura-ch.fku.ed.jp>



学校教育目標を意識して グランドデザインを作成

福岡県立小倉商業高校は、地域に根差した商業高校として100年以上の伝統を持つ。生徒は卒業後に約半数が就職するが、就職先のほとんどは福岡県内の地元企業だ。大学進学者を含めると、約8割が卒業後も地元に残る。

同校は、新学習指導要領の実施に向けて、地域人材の育成を念頭に、主幹教諭と指導教諭が中心となって既にグランドデザインを作成していた。しかし、それは、各分掌が策定した教育目標や指導方針が詰め込まれた状態のもので、それぞれの目標や方針の関係性が明確にはなっていないかった(図1・右)。

「ステークホルダーに、方向性・課題をより分かりやすく伝えられるように改善に着手しようとしたものの、どこから見直せばよいのか悩みました」と、主幹教諭で教務主任の木下祐彦先生は語る。

そうした中、指導教諭で研修主任・学年総括主任を務める松藤史紹先生は2019年3月、VIEW21編集集部が主催したカリキュラム・マネジ

メントに関するワークショップ(※1)に参加。講師の関西大学教育推進部森朋子教授の話の中で、学校教育目標の達成を意識した教育課程の構築手法を知った。そこで、学校が目指す方向性をシンプルに示すことができるグランドデザインのイメージが、一気に見えてきたと言う。

学校に戻ると、松藤先生はまず、「そもそも本校が地域から長年信頼を得られてきた理由は何か」という、学校の根本的な存在意義から考えることにした。その結果得られたのは、同校のモットーである「清く 明るく 健やかに」高校生活を送る生徒を育成できていることが、地域からの評価につながっているのではないかとということだった。

そのため、19年度のグランドデザインでは、「清く 明るく 健やかに」を最上位の目標に置き、「その目標を達成するためには、どのような資質・能力を生徒に育成する必要があるのか」「その資質・能力は、どのような教育活動を通して育成を図ることが可能か」といった手順を採った。すると、短期間でグランドデザインを見直すことができたと言う(図1・左)。

*1 ワークショップの内容は、本誌2019年6月号・特集に掲載。

究」を通じて、地域や社会が抱える課題や、その課題に取り組む地域の人たちの姿を知り、自分たちには何ができるのかを考えさせる。そうして地域についての関心を高めさせてから、2年次に、ボランティア活動等の地域活動に自主的に取り組むように促す。そして、3年次の「課題研究」において、地域に密接にかかわる課題を生徒自身に設定させ、調査・研究・実験を通じた探究に取り組ませる。

地域の人たちの意見をカリキュラムに反映させる

同校の「総合探究」には、年度初めのカリキュラム編成時とその後の柔軟な運用に特徴がある。まず、編成時の特徴は、地域と連携し、地域の人たちの意見を取り入れてカリキュラムづくりを行っている点だ(図2)。同校の地域連携を主導する新井勇治先生は次のように語る。

「本校の文化祭である『倉商祭』では、商業活動を実験するという目的で、生徒自身が商品の仕入れから店舗運営、物品販売までを行う活動に取り組みますが、それは地元企

業の協力なしでは実現し得ないことです。本校は地域とのつながりが強いので、カリキュラムを地域の人たちとともに作るができます」

19年度の「総合探究」では、最初に教師間で練ったカリキュラム案を、地域人材育成事業などを行っている一般社団法人「まちはチームだ」の中川康文さんなどに見てもらった。返ってきた感想は、「もっと生徒がポジティブな気持ちになれるテーマがよい」というものだった。中川さんは語る。

「北九州市は、公害や人口減少を始めた様々な社会課題に取り組んできた課題先進都市です。『君たちはこの地域でいろいろな社会課題に取り組むことが可能で、それは世

界の課題に取り組むことにもつながっていくんだ」といったメッセージを発信すれば、生徒はより前向きな気持ちで課題に向き合えるのではないかと話しました」

それを受けて「社会や地域をよくしたいし、よくできるはずだ」といった強い思いと希望を持って活動するような大人たちに触れる機会を多くカリキュラムに組み入れることにした。また、起業支援などに取り組む中川さんを講師としても招いた。

「総合探究」のカリキュラムの中には、「夢授業」という地域の職業人を学校に派遣する活動を行う、九州キャリア教育研究会による授業も組み入れた。同研究会会長の木原大助さんは語る。

「職業人の話を聞く時の生徒の熱心さが、他校の生徒とは違って目を見張るものがありました。きっとそれまでの活動を通じて、『地域の人から話を聞くことは、自分の生き方を考える上で大

「今の時代は、企業に勤める以外にも、多様な働き方が可能になっています。高校生は社会の未来ですか

図2 令和元年度 第1学年 「総合的な探究の時間」

1回	オリエンテーション/探究の7つのプロセス
2・3回	キャリアワークショップⅠ(その1・2)
4回	探究の7つのプロセスを振り返る
5回	社会課題、地域課題から地域を見つめる
6回	テーママイニング 可視化される未来
7回	中・日本・福岡県・北九州市が抱える社会課題とは?
8回	社会課題の解決に向けた取り組み
9回	1学期の学びを振り返る
10・11回	これからの社会と求められる人材(その1・2)
12回	探究の振り返り(クラス別)
13・14回	2030SDGsワークショップ(その1・2)
15回	2030SDGsワークショップ振り返り
16回	講演(北九州市役所 職員)
17回	講演(国造平氏/中川康文氏)
18回	探究の振り返り(クラス別)
19回	たった一人の高校がなぜこのプロジェクトをおこし、やり上げたのか? 講演(高校教員)
20回	講演(北九州市立大学 地域創生学群 教授)
21回	探究の振り返り(クラス別)
22回	倉商祭を別の角度から見てみよう
23回	生徒会副会長による倉商祭ごも問題についての問題提起
24回	探究の振り返り(クラス別)
25・26回	社会課題解決のためのビジネスプラン作成講座(その1・2) / 日本経済新聞社
27回	各課題のリフレクション/「夢授業」準備ガイダンス
28・29回	九州キャリア教育研究会「夢授業」(その1・2)
30回	「夢授業」準備ガイダンス
31回	探究の振り返り(クラス別)
32回	探究を始めた高校生(小倉商業Ver.)
33回	探究を始めた高校生(福岡の高校生Ver.) / 講師指導・キャリア教育支援 職員
34・35回	キャリアワークショップⅡ(その1・2)

*学校資料を基に編集部で作成。



小倉商業高校の「総合的な探究の時間」を支えてきた地域の人たち。左から中川さん、岡さん、木原さん。地域の職業人が集うコワーキングスペース秘密基地にて。



左から九谷さん、有廣さん。探究的な学びの経験と成果を後輩である1年生に話した。

ら、自分も社会に身を置く立場として、多様な可能性を生徒に示すチャンスをいただけるのは、私たちにとっても貴重な機会です」

生徒の状況を見ながら カリキュラムを柔軟に変更

同校の「総合探究」のもう1つの特徴は、カリキュラム編成後の柔軟な運用だが、それはすなわち、年度当初に立てた計画に縛られず、生徒の状況に合わせてカリキュラムを運用しているという点だ。

例えば、2学期のSDGs（*2）ワークショップで視点を学んだ際に、生徒の社会や地域への関心は

高まったように見えた。しかし、直後に開催された倉商祭で大量のゴミが発生したことから、「身近な課題とSDGsがつながっていることに、多くの生徒が気づいていないと感じた」（松藤先生）と言う。そこで、同じ気づきを持った当時の生徒会美化委員長、3年生の有廣陽さんに、1年生の前でゴミ問題について話してもらった機会を設けた。

「私たちは商業を学んでいるけれども、これからのビジネスは、売上や利益とともにゴミを減らすなど、環境との両立を考えないと、社会に受け入れてもらえなくなるのではと問題提起をしました」（有廣さん）

また、学校の特別プログラムで地域の大人たちと一緒にビジネスアイデアの構築などに取り組んできた3年生の九谷和未さんにも、2月末に1年生の前で地域での探究活動について話してもらったことになった。

「学校を出て地域の人と一緒に活動するのは勇気があることです。でも、0.5歩でもよいから踏み出してみると、学校の中にいるだけでは知ることができなかった考え方を知り、世界が広がっていくのではと伝えました」（九谷さん）

商業の視点から 地域の課題に取り組む

同校では、既に3年次の「課題研究」の改革にも着手していた。

同科目では3学期に、3年生が2年生の前で、自分たちの研究内容や成果を発表するポスターセッションを設けている。2年生は3年生の話をもとにしながら、自分が3年生になった時に研究してみたいテーマを絞って考える。研究テーマは先輩が取り組んだテーマを引き継いでもよいし、自分で新たに設定してもよい。また、個人研究、グループ研究のいずれも可としている。

これまでのテーマを見ると、「門司港を活性化させるための商品開発」「竹害を減らすことをねらいとした竹のスマートフォンケースの開発」など、生徒が学んできた商業の視点から地域の課題を捉えたものが多いことが分かる。そのため、「課題研究」においても、地域との連携が欠かせない。「課題研究」担当の白石智代先生はこう話す。

「商品開発は、生徒の力だけでできるものではありません。地元企業の協力を得て、社員の方と一緒にア

イデアを出しながら取り組んでいきます」

地域に出て行う活動は、生徒たちが商業を実践的に学ぶ貴重な機会にもなっている。「課題研究」担当の秦陽子先生は話す。

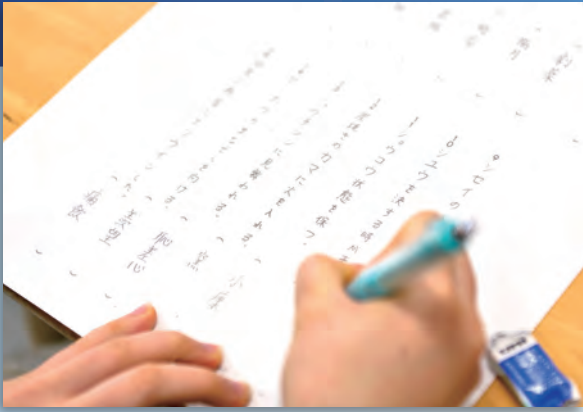
「私が担当したグループは、マーケティングの探究で、商業施設の来店客にアンケート調査を行いました。生徒にとっては『もっとこういう調査項目にすればよかった』といった反省点の多い結果になりました。授業で学んだことを、生徒が現場で試すよい機会になりました」

19年度に「総合探究」を経験した生徒たちが、3年生に進級するのは21年度のことだ。「課題研究」担当の橋本あゆみ先生は、その時に向けての展望をこう語る。

「1年次の『総合探究』では志を身につけ、2年次に地域や社会のために何ができるのかを考えます。そして、3年次にそれまでに学んできたすべてのことを統合して『課題研究』に取り組むという流れを構築したいと思っています。探究学習を軸に、すべての生徒が『清く明るく健やかに』学べる3年間のカリキュラムの実現を目指していきます」

*2 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた持続可能な開発目標のこと。「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」など、17の目標と169のターゲットから成る。

14:00 漢字テスト



授業は、漢字テストからスタート。同テストは、生徒を数人ずつに分けたグループが持ち回りで、学習範囲内から間違いやすい漢字を選んで作問する。作問過程で漢字の成り立ちなどに目を向けさせ、学習効果を高めるねらいがある。生徒相互に採点後、作問を担当したグループが、今回出題した漢字を選んだ理由や間違いやすい点などを解説した。

授業
ハイライト

●2年生「国語」の現代文で、評論を読み解く全9時間のうちの8時間目。評論『である』ことと『する』こと』について、各教科・科目の学習内容を用いながら、抽象的な文章の内容を具体的に説明する発表を行った。(P.37に単元の指導計画を掲載)

主体的・対話的で
深い学びへ

実践
アクティブ・ラーニング

現代文

評論をベースに各教科・科目を
つなぐ「リレー現代文」で、
豊かな思考力や発想力を育む

美田先生のアクティブ・ラーニング

教科の枠組みを取り払い、
思考を広げて深める学びを実現

東京都立戸山高校の美田恵先生は、知識構成型ジグソー法(※1)を活用して文章読解を行うなど、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れて授業改善を行ってきた。生徒は、素材文中から該当箇所を抜き出すような問題に解答することは得意だが、具体的に説明するような記



東京都立戸山高校

美田 恵 みた・めぐみ

教職歴6年。同校に赴任して2年目。

国語科担当。知識構成型ジグソー法などを活用しながら、アクティブ・ラーニングの視点での授業改善を推進。

*プロフィールは2020年3月時点のものです。

東京都立戸山高校

◎「自主自立」の精神を重んじる都内有数の進学校。3年間、文理別のクラス編成をせず、総合力を育成する教育が特徴。文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」指定校(現在4期目)。東京都教育委員会「進学指導重点校」「チーム・メディカル」指定校。

◎設立 1888(明治21)年

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約320人

◎2019年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、筑波大、お茶の水女子大、東京工業大、東京大、一橋大、京大などに206人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田などに延べ851人が合格。

◎URL <http://www.toyama-h.metro.tokyo.jp/>

*1 ジグソーパズルを解くように、協力して全体像を浮かび上がらせる協調学習法の1つ。ある課題について、複数の視点で書かれた資料を読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、考えを深めていく「ジグソー活動」、全体でグループの意見を交換する「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

14:15 各グループの発表①



前時までにグループでまとめた内容を各グループ3分間で発表。台本を用意して発表を分担したり、黒板に要点を書いたから発表したりと、グループごとに方法を工夫していた。発表は、「である」状態（権利など）は、「する」行為の継続によって保たれることなどを論じた評論の内容について、各教科・科目の学習内容を用いながら具体的に説明するというもの。

14:10 発表手順と注意事項を説明



前時までに作成した全10グループの発表資料とフィードバックシートを配布後、美田先生は、発表の手順や注意点を説明した。発表を聞く際には、発表しているグループから学ぼうとする意識を持つことの大切さを強調して伝え、フィードバックシートには、必ず全グループの発表について印象に残ったことや感心したことなどを、それぞれ記入するよう指示した。

述式問題は苦手であり、従来の講義形式の授業では、問いの本質を理解する力や表現力を育成することは難しいと考えたからだ。

そうした中、2019年度に参加した「STEM AMU プログラムハッカソン」(*2)で教科横断型の授業づくりを学んだことがきっかけとなり、現代文で教科横断型の授業を行った。

「授業で用いた題材から得られる考え方を広げ、またそれを深めるために、教科横断型の学びは有用だと考えました。加えて、学びを授業の中で閉じずに、他教科・科目の学習内容とのつながりを実感させることで、国語での学びがより楽しくなることも期待しました」

今回の題材である評論、丸山真男の『「である」と『する』こと』(P.37図で内容を解説)は、抽象度が高く、筆者の主張を捉えるためには、その文章を具体的に落とし込んで考える必要がある。そうした読解力を育成するために、美田先生が考えたのが「リレー現代文」だ。国語や数学、日本史など、10の教科・科目をグループで分担し、担当の教科・科目において「である」と「する」ことで説明できる事象を探し、発表し合うという授業だ。

思考の活性化・深化への配慮

「生みの苦しみ」を経験させて、学びの本質の理解につなげる

生徒が「リレー現代文」をイメージできるよ

う、最初の授業では、夏目漱石の『現代日本の開化』を題材に、抽象度の高い文章を各教科・科目の知見を用いて具体的に言い換える活動を、美田先生が見本として行った。

「生徒が学びのイメージを膨らませてワクワクした気持ちを持てるかが、活動の成否を決めると考えました。そこで、『現代日本の開化』で述べられている日本の近代化について、美術や歴史で学ぶ事柄を用いて具体的に説明したところ、『自分もやってみよう』と、生徒の活動への関心が高まっているのを感じました」

担当教科・科目を決めるグループ分けでは、今回の題材の評論の内容と結びつけることが易しそうな公民などに生徒の選択が集中し、学びが広がらないことが懸念された。そこで、美田先生は、「つながりが見えにくい教科や科目に挑戦すると楽しいよ」と投げかけた。すると、約3分の1が理系の教科・科目を選んだ。

化学を選んだ生徒は、その理由について、「難しくてやりがいがありそうだったので、得意科目の化学を選びました。実際、本当に難しく、『である』『する』を説明するのに適当な事象を見つけないことに苦労し、『中和滴定』があたりそうだと気づいたのは、発表資料の提出期限日の前日でした」と話す。

知識構成型ジグソー法を用いて意味段落ごとに評論の本文を読解した後、グループでの考察を行った。そこで初めて、評論の内容を各教科・科目の学習内容と結びつけて考える難しさ

*2 経済産業省が推進する「未来の教室」事業の委託事業として、ベネッセが開催したSTEAMプログラムに関する教職員研修。

14:45 振り返り



美田先生は、「複数のグループに共通する大切な見方があったのは分かりましたか？」と問いかけ、その問いについてグループごとに話し合わせた。そして、「共通していた見方は、『筆者と違い、自分たちはこう考えた』といった批判的な視点です。筆者の主張が絶対と思わないことも大切です」と話し、次の授業ではそうした視点を深めることを伝えた。

14:30 各グループの発表②



他グループの発表で気づいたことは、フィードバックシートに記入。例えば、化学のグループが中和滴定とフロンガスによるオゾン層破壊の2つの現象を示し、化学の領域にも「である」と「する」の異なる性質が存在することを説明した発表に対して、「『である』と決めつけず、『する』ことによつて検証することが大切だと分かった」と書く生徒がいた。

に、多くの生徒が気づいたという。2時間分をグループワークに充てたが、多くのグループが最初の1時間では評論の内容を具体的に説明できる例を見つけられず、休み時間も話し合っていた。難題に立ち向かう生徒のチャレンジ精神を引き出したことが収穫だったと、美田先生は話す。

「その段階で生徒が苦勞すると予想していましたが、未経験の活動を通じて、与えられた問題を解く学習にはない、生みの苦しみを経験させて、学びの本質を理解させたいという思いがありました」

本時では、そうした過程を経てまとめた内容を発表した(図)。他グループの発表で気づいたことはフィードバックシートに記入。後日、美田先生がその気づきの内容をグループごとにまとめ、各グループに返すことで、自分たちの発表内容の振り返りを行えるようにした。

場づくりへの配慮

生徒の思考が熟するまで待ち、グループ学習を活性化させる

話し合いが停滞するグループがあっても、美田先生は待つことを心がけた。黙って話を聞き、時折、生徒のつぶやきを拾って「それは、どういうこと？」などと、あくまでも生徒が自身の考えを深めるきっかけをつくることに徹した。

「本校の生徒の多くは、1人で黙々と学習を

進めることが得意で、グループ学習をあまり好まないのですが、どのグループもしっかり話し合っていました。自分の力だけでは解決できない難しいテーマに取り組み、一人ひとりが考えを出し合い、議論を進める中で、『協働』の重要性に気づいたのでしょう」

成果と課題

粘り強さや忍耐力を發揮し、教科・科目の壁を乗り越えた生徒たち

本活動を通して、美田先生は生徒の強みを再認識したという。

「生徒は、私が思う以上に粘り強さや忍耐力を持ち、それらの力を發揮して教科・科目の壁を乗り越えていきました。途中で教科や科目の変更を申し出るグループもなく、どのグループもしっかり考え抜いて発表に至りました」

発表内容は、美田先生の想定を上回るものばかりだった。国語のグループは、夏目漱石の『こころ』や昔話『桃太郎』を「である」「する」の視点で読み解いて分かりやすく説明し、理系の教科・科目のグループも、説得力のある論理を展開していた。地学グループの生徒は、次のように語った。

「人間がない時代は、地球は常に『である』の状態と言えます。そうした状況において、人間がいかに『する』の状態を持ち込んだのかを考えました。同じ日の保健体育の授業で、酸性

単元の指導計画

【教科・科目】国語・現代文B 【分野・単元】評論 【テーマ・作品】丸山真男『『である』ことと『する』こと』

【設定時数】全9時間の中の8時間目 【単元目標】試行錯誤を通して学問の基本姿勢を体感する。

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> 夏目漱石『現代日本の開化』をA4判1枚に要約する。 授業者による「リレー現代文」のデモンストレーションを聞き、これから取り組む学習について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 文章のつかみ方を学ぶ。 自分たちがこれから何をやるのかを把握できる。 「各分野で読み解く」とは、どういうことかを理解する。 【知識、思考力】	<ol style="list-style-type: none"> ①夏目漱石『現代日本の開化』を各自で読み、要約する。 ②授業者による「リレー現代文」のデモンストレーションを聞く。 ③各自、再度文章を読み、読み方が変わったかを確認する。 	【主体的な学び】 これまでとは異なる学問へのアプローチの面白さを味わう。 【深い学び】 これまでの評論読解とは異なる、他教科からのアプローチの手法を知り、着眼点を多様化する。	<ul style="list-style-type: none"> ・要約シート ・観察
5・6	<ul style="list-style-type: none"> 「リレー現代文」の内容をグループで考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評論の内容を多様な文脈で表現することができる。 【技能、思考力、表現力、多様性、協働性】	<ol style="list-style-type: none"> ①題材の評論を、担当する教科・科目にどう引きつけるかを、グループでじっくり考える。 ②見当がつけいたら、資料を作成し始める。 	【主体的な学び】 評論を各教科・科目の文脈に落とし込むことで、評論への理解が深まることを実感する。 【深い学び】 まずは耳を傾け、細かいつづやきを教師が拾うことで、一つひとつのつづやきをグループで掘り下げていく。	<ul style="list-style-type: none"> ・グループワーク
7	<ul style="list-style-type: none"> 知識構成型ジグソー法の形式で、各意味段落の内容を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評論の内容を自分の言葉で的確に相手に伝えることができる。 【思考力、表現力、協働性】	<ol style="list-style-type: none"> ①グループ内で1人1つの意味段落を分担。意味段落ごとに担当者が集まって新しいグループとなり、その意味段落を読解する。 ②元のグループに戻り、1人3分間で担当の意味段落を説明。 	【対話的な学び】 自分の担当段落をグループのメンバー全員がよく分かっていないといった状況で、ほかのメンバーに伝わるよう、より言葉を尽くして語ることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・観察
8	<ul style="list-style-type: none"> リレー形式で、各グループが発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの発表内容を効果的に伝えることができる。 【思考力、表現力、協働性】	<ol style="list-style-type: none"> ①各グループ3分間で、全体に向けて発表する。 ②発表で気づいたことは、「フィードバックシート」に記入する。 	【主体的な学び】 的確な表現で、大勢の他者に向けて説明する。	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・発表資料 ・フィードバックシート
9	<ul style="list-style-type: none"> 最終意味段落を全体で確認。 全員の発表内容を綴じ込み、「解説書」としてフィードバックする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・評論全体の内容を理解することができる。 【知識、思考力】	<ol style="list-style-type: none"> ①最終意味段落を音読し、適宜分かりにくい部分がないかの最終確認をする。 ②これまでのすべての資料をひとまとめにして全員に配布する。 	【主体的な学び】 同じ趣旨の話それぞれがどのように表現しているかを楽しむことができる。 【対話的な学び】 同じ趣旨の話他者がどのように表現しているかを比較できるか。 【深い学び】 最終意味段落の内容について「現在」における具体例を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・発言 ・ペアワーク

*美田先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。単元の指導計画の全9時間分は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp/>) からダウンロードできます。「HOME →教育情報 →高校向け」をご覧ください。

☒ 題材の評論の内容、及び各グループの発表内容

◎評論の内容

近代社会は、前近代社会の身分的秩序を支えた状態重視の「である」論理から、運動や過程重視の「する」論理への移動によって生まれた。しかし、近代日本では「である」価値が依然として根を張っている現状もあり、「する」論理と「である」論理との間に挟まれた日本人は、一種のノイローゼ状態に陥っている。

◎各グループの発表内容（抜粋）

公民 主に日米の憲法の制定・改正過程から、両国の違いを分析。日本国憲法の制定過程には、GHQなどの意向が強く反映されている上に、各国の憲法改正回数を比較すると、アメリカ27回、ドイツ57回などに対して日本はゼロである点にも、「である」の色合いの強さが表れていると指摘した。

数学 「『+』は足すこと、『-』は引くことを意味するように、『である』論理だけに見えるが、ある目的下では符号や演算の記号になるなど、特定の意味を持つ『する』論理になる」といった論理を展開。「一見関係のない数学にも応用できると分かって面白かった」「数学の見方が変わった」といったコメントがあった。

雨について学びました。酸性雨は、人間の活動によってもたらされたものです。『する』で説明できると考えて、論理を組み立てました」

また、複数のグループが、題材の真意を的確に捉えて論じた上で、筆者と自分たちの考えは異なるといった批判的な見方を提示した。美田先生は、その気づきを大事にしたいと、単元の構成を変更した。

「今回取り上げた評論が発表されてから半世紀以上が経ち、文中の『現代』『近代』などは、今を生きる私たちにとって意味が少し異なります。その気づきをさらに深めさせたいと考え、授業を1時間増やし、現在を『である』『する』論理で改めて見つめ直す学習を行いました」

今後の課題は、他教科・科目との連携だ。今回は、美田先生が他教科・科目の教科書などを読み、生徒の発想を想定した上で指導計画を立てて授業に臨んだ。いずれは、生徒が国語の授業中に、他教科・科目の教師に直接質問する場を設け、より専門性の高い学びにつなげたい考えだ。さらに、生徒自身が各教科・科目のつながりを意識して学べるようにするため、今回のような授業を1年次から行うことも目指す。

「教科横断の学びを通して育まれる思考力や発想力、協働力などは、学びの土台としてこれからの人生で生きるものであり、何より学びの楽しさを一層感じられると思います。私自身が楽しむことを忘れずに学び続け、そうした授業づくりに取り組んでいきます」

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校

探究学習

当事者意識を持ちながら 深い問いを立て、 課題に向き合う生徒を育成

変革のステップ

背景と課題

- 自分が関心のあることに基づき、生徒に研究テーマを設定させる探究学習を進めていたが、意欲が高まらない生徒がいた

実践内容

- 研究テーマの設定の視点を改善** S GH (*1) 指定時には、「社会問題の解決」の視点で設定させていた研究テーマを、G型 (*2) 指定後には、「地域と協働した社会問題の解決」の視点で設定
- 生徒に何度も問いかけ、内面を揺さぶる** 研究テーマを設定した理由などを生徒に問いかけ、自分と研究テーマのかかわりを深く考えさせる
- 地域連携の推進** 地域のイベントに参加することなどを通じて、地域と協働で探究学習を進めることにより、当事者意識を育む

成果と展望

- 当事者意識を持ち、問題解決のために地域に積極的に働きかける生徒が増えた
- 今後は、生徒に自身の成長について実感を持たせるため、探究学習を通じて育成した資質・能力の評価方法を確立したい

PROFILE



1994年4月に全国初の公立中高一貫教育校として開校。99年度、現校種に変更。中高6年間を見通した独自のカリキュラムを編成している。全寮制で、1学年約40人の生徒に対して教師約6人を配置した少人数教育が特徴。

設立	1994 (平成6) 年
形態	全日制 / 普通科 / 共学
生徒数	1学年約40人

2019年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、電気通信大、広島大、九州大、長崎大、宮崎大、鹿児島大、宮崎公立大などに22人が合格。私立大は、日本大、明治大、近畿大などに延べ13人が合格。

住所	〒882-1203 宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町大字三ヶ所 9468-30
電話	0982-82-1255

Web site <http://gokase-h.com/>

*プロフィールは2020年3月時点のものです。

開校時から探究学習に力を注ぎ、 取り組みの質を高める

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校は、九州山地の中央部に位置する自然豊かな五ヶ瀬町に、全国初の公立中高一貫教育校として1994年4月に開校した。1学年約40人の全寮制で、少人数教育を特徴とする同校では、開校時から「フォレストピア学習」と名づけた探究学習に力を注いできた。村山育志^{やぶし}教頭は、二十数年間にわたって試行錯誤してきたのが探究学習だったと振り返る。

「本校の探究学習は、3つの段階で進化してきました。各段階で一定の手応えを得ながらも、生徒の学びの質を高めたいという意識を教師が常に抱いていたからこそ、前進し続

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。 *2 文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業 (グローバル型)」。

「けられたのだと思います」

開校時から2013年度までの第1期では、「個性の開発」を掲げ、地域の自然や文化の中から、生徒が自身の関心に基づいて設定した研究テーマを追究する形だった。第2期の2014年度からは、SGHの指定校として、社会問題の



教頭
村山育志 むらやま・やすし

教職歴26年。同校に赴任して1年目。「知的好奇心をくすぐり、他者とのつながりを築き、生徒を育てたい」



魅力づくり・発信プロジェクトリーダー
東口匡樹 ひがしくち・まさき

教職歴19年。同校に赴任して11年目。「100年後の子どもたちがわくわくしながら学べるように、多様性のある教育を目指す」



研究調査部主任
上水陽一 かみみず・よういち

教職歴17年。同校に赴任して9年目。「共学共創の精神を持ち続け、『社会にインパクトを与えられる教師』を目指す」



教務部主任
牧野亮司 まきの・りょうじ

教職歴15年。同校に赴任して7年目。「すべての学びは問いから。何をどのようにつづるか」を常に生徒とともに追求し続けたい」



研究調査部副主任
鈴木圭介 すずき・けいすけ

教職歴11年。同校に赴任して2年目。「他人事」を『自分事』にする。それが深い学びや協働につながる。日々実感している」



宮崎県高千穂町役場財政課総合政策室
田崎友教 たさき・ともり

「世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会」で地域活性化に取り組む。地域協働学習支援委員として、同校を支援。

解決案を探究することに取り組ませた。そして第3期の現在は、19年度に文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」（以下、G型）の指定を受け、地域と連携した探究学習を推進している。

「探究学習」で求められているのは、地域や社会の問題に目を向け、当事者意識を持ってその解決に取り組む力の育成だと考えています。本校も、生徒が地域の中に飛び込み、より実践的に社会問題に向き合える取り組みを目指しています」（村山教頭）

研究の意義を感じられるよう、社会問題解決型の探究学習に

同校の探究学習の進化を具体的に見ていこう。「個性の開発」を掲げた第1期から「社会問題の解決」に重きを置いた第2期への移行は、生徒に研究目的を明確に持たせたいという思いから始まった。開校以来、同校が大事にしてきたのは、「恵まれた自然の中での体験」であり、教科学力に加えて、創造力や発想力といった資質・能力を育むべく、探究学習に力を入れてきた。しかし、例えば、「野鳥の観察」などに夢中で取り組む生徒がいる一方、「自分の好奇心を満たすための研究でよいのか」と疑問を持つ生徒もいた。そこで、「個性の開発」という教育方針を見直し、研究テーマの対象を社会問題にすることにした。魅力づくり・発信プロジェクトリーダーの東口匡樹先生はこう語る。

「当時は、地球温暖化や貧困問題など、いくつもの社会問題が表面化していました。自分の研究は、社会問題の解決に役立つという実感を生徒に持たせることで、探究学習に取り組む意欲をさらに高めようと考えました」

SGHの指定校になった14年度の第2期では、「フォレストピア学習」での研究テーマの設定方針を見直し、「グローバルフォレストピア学習（以下、GF学習）」を始めた。1・2年次は、地域での体験学習を通じて地域や日本社会に対する関心を高め、3年次には、グローバルな課題を知るとともに、探究学習の進め方を学ぶ。そして、4年次からは、社会問題の4領域（経済格差、環境、エネルギー、高齢化）から各生徒が1領域を選んで研究テーマを設定し、調査や考察を重ねて、5年次後半〜6年次に、研究成果を日本語の論文や英語のサマリーにまとめ、発表するといったカリキュラムにした。

生徒に何度も問いかけ、揺さぶりをかけて考えさせる

研究対象を社会問題としたことで、テーマ設定に戸惑う生徒は少なくなり、研究の意義を感じたためか、生徒は活発に議論するようになった。探究学習への意欲が高まったように思えたが、ニュースなどで見聞きした内容を引用して発言しているに過ぎない生徒も少なからずいた。そこで、教師間で議論を重ね、生徒への問いかけを徹底して行うことにした。例えば、「高

齢化が進む五ヶ瀬町の改善」を研究テーマにした生徒に、「なぜ、そのテーマが大事だと思ったのか」「なぜ、そのテーマに関心があるのか」「町の人に話を聞いてみたのか」「話を聞いてどう感じたのか」など、何度も丁寧に問いかけた。

そのようにして生徒の内面に揺さぶりをかけることで、徐々にではあるが、地域の課題を自ら見だし、ビジネスモデルの提案を行うといった生徒が現れ、学外のコンクールや発表会で高い評価を得る生徒が増えていった。教師間で、問いかけの工夫によって表れる生徒の成長などを共有し、多くの教師が「なぜ」を意識して問うことで、課題を自分事として捉えられる生徒も現れ始めた。そして次第に、推薦・AO入試での志望理由書の質が変わっていったと、教務部主任の牧野亮司先生は語る。

「以前は、自分の希望を伝えるだけの志望理由にとどまっていました。しかし今は、『社会問題を解決するために、多角的に問題を分析する力をつけたい。そのために、この学科で学びたい』と、社会問題と自己の関心を結びつけて、志望理由を書けるようになりました。そうした変化が、推薦・AO入試の合格者の増加という結果にもつながっています」

地域との深いかかわりが 当事者意識につながる

同校の教師が探究学習の手応えを感じる一方で、学校から出された課題だから取り組んで

いるという受け身の姿勢が感じられる生徒が少なからずいた。少子高齢化や人口減少、農林業を中心とした産業の停滞などが顕在化している「超課題先進地域」の五ヶ瀬町で学んでいるのに、ただ課題をこなし、器用に研究をまとめるだけで卒業してほしくない——そうした教師たちの思いが、探究学習を第3期へと進ませた。研究調査部主任の上水陽一先生はこう語る。

「生徒が本当に当事者意識を持っているのなら、提案や発表にとどまらず、自分のアイデアを実現させようと行動するはずですが、しかし、そうした生徒は、なかなか現れませんでした。GF学習では、どんなに優れたアイデアでも、提案がゴールになっていました」そこで、G型に指定された19年度、生徒が地域と協働しながら社会問題の解決に向けて行動できるように、地域と連携した活動を増やした。

「地域の多様な人々とかかわる中で、『地域のこの問題を何とか解決したい』という当事者意識が醸成され、自発的に社会に参画するようになることを期待しました」（上水先生）連携先は、「世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会」だ。同校がある五ヶ瀬町と周辺4町村は世界農業遺産に認定され、農業や林業、文化、行事などに関する様々なプログラムを行っている。学校はそれらに生徒が参加できるようにし、生徒の探究学習を支援してくれる地域人材の紹介を各自自治体に依頼している。高千穂町職員で同協議会事務局の田嶋友教さん

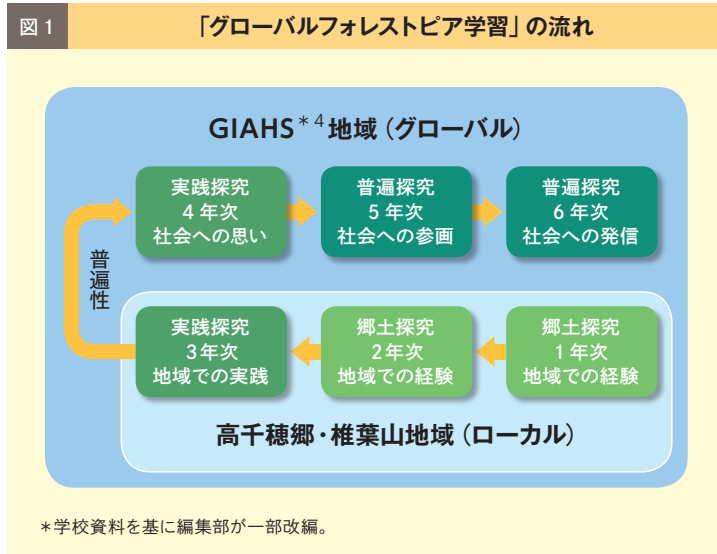
は、同校との連携の意義を次のように語る。

「地域の未来を担う子どもたちが、幼少期から地域の自然や文化に触れるとともに、課題にも目を向けることが大切だと考えています。そうした経験を積み重ねてこそ、大人になった時に当事者意識を持って地域の課題に取り組めるようになり、この地域を離れたとしても、故郷を忘れず、いずれ何らかの形で地域にかかわってくれるのだと思います。地域で活躍する人材の育成を目指す本協議会にとって、地域の学校との協働は重要です」

抽象的・普遍的な問いを 深める力を育む

GF学習のカリキュラムも見直し、3年次に「マイプロジェクト」を導入した。生徒は、自分の「Will」（やりたいという思い）と、地域の「Needs」（社会的な必要性）の交点で研究テーマを設定し、研究に取り組む。例えば、お菓子作りが好きな生徒は、地元の特産物を活用した新しいお菓子を、地域の協力を得ながら開発する活動を行っている。

「研究テーマを4領域に限定していた時は、4年次に自分で選べるとは言っても、必ずしもそれが自分の関心のあるテーマとは限らなかつたでしょう。今では、自分の提案を実行に移す生徒が次々と現れています。研究テーマは、生徒の『Will』から出発し、粘り強く『Needs』との交点を探ることが大事なのだ



と実感しています」(上水先生)

4年次には、国際バカロレアの「TOK(知の理論)」(*3)を用いて、問題を多様な視点で捉えて問いを立てる力の育成を始めた。その力があれば、地域特有の研究テーマでも、普遍的に通用する問いを持ちながら課題に向き合える。例えば、3年次の「マイプロジェクト」で「五ヶ瀬町の過疎を食い止めるために、移住者を増やしたい」という課題に取り組み生徒が、「人はなぜ、定住するのか」「住むとは、どういうことか」などと、より普遍的なレベルまで自らの問いを深めて、課題に向き合うことを期待している。

その上で、5・6年次の「普遍探究」では、4年次までの成果を踏まえて研究テーマを設定し、計画を立て、調査・分析・考察を重ねて、論文にまとめる。そして、その内容を地域に発信し、地域と問題意識を共有することを目指す(図1)。

問いを立てる力の育成は、試行錯誤の連続だと、研究調査部副主任の鈴木圭介先生は語る。

「1年間取り組んできて、これだという指導方法はまだ見つかっていません。ただ、担当教科の国語の授業で、日本人が明治時代以降、時間に縛られるようになったことについて述べられた評論を読んだ際、生徒から、『そもそも人類の歴史において、時間の概念はどのように変容してきたのか』という質問が出てきました。そのように、生徒の質問の質が変わったと感じる場面に出合う度に、問題の根本を捉える力が徐々に身に付いてきていることを感じています」

5つの資質・能力の到達目標を示し、自己評価をさせる

今後の課題は、探究学習を通じて育成した資質・能力の評価方法の確立だ。同校では、G型の指定を受けた際、目指す生徒像を、当事者意識を持って周囲の人やコミュニティーに働きかけながら、目の前の課題に取り組むことをイメージして、「野性味あふれる地球市民」とした。そして、そうした生徒が備える資質・能力として、「見る力」「問う力」「試みる力」「関連づけ

図2 「学習評価シート 5年生」(抜粋)

見る力		チェック欄
知る	研究を進めていく上で、何をどう見ていくか、気づきを持つことができる。	
つなげる	研究を進めていく上で、本質的な事柄に目を向けることができる。	
応用する	研究で学んだことや発見したことを、多角的に捉えることができる。	
問う力		チェック欄
知る	研究において、多くの問いを立てることができる。	
つなげる	研究の中で生じた疑問点について、しっかりと調べていくことができる。	
応用する	研究を通じて、自らの問いに対して深く考え抜くことができる。	
試みる力		チェック欄
知る	失敗を恐れず、より深い学びに向かう行動が取れる。	
つなげる	自らの独創的なアイデアに基づいて、多様性のある実験・検証ができる。	
応用する	批判的思考力を生かして、自らの既存概念を打破し、新しい自分探しをすることができる。	

*学校資料を基に編集部で作成。

る力」「つなげる力」を設定。それら5つの資質・能力について、学年ごとの到達目標を示した「学習評価シート」(図2)を作成し、それを使って生徒に継続的に自己評価をさせ、自身の成長を実感させようとしている。

「本校が目指すのは、地域で協働できる人材の育成です。地球市民の一員として社会参画する以上、課題があればそれに取り組むという考え方で探究学習を推進しています。その過程で育まれる『見る力』や『問う力』などを適切に自己評価できるようにしたいと考えています」(上水先生)

*3 Theory of Knowledge の略。国際バカロレア資格の取得プログラムの1つで、論理的思考力や、狭い見方にとらわれない批判的精神、コミュニケーション能力などを養うための授業。 *4 Globally Important Agricultural Heritage Systems の略。世界重要農業遺産システムのこと。

指導ツールの改良を、これまでは他校の教師とともに検討してきた本コーナーは、今号から、校内の教師同士で検討するコーナーにリニューアル。初回となる今号は、静岡県立下田高校で2年次6月に活用している「学部・学科調べワークシート」について検討した。

Before

自分が興味・関心のある学問系統と、適性検査でマッチング度合いが高いと診断された学問系統の、2つの学問系統を調べること、生徒の視野を広げる。表面と裏面の主要な質問項目は同じ。自分の興味・関心と適性検査の結果が一致していれば、表面の記入のみでよい。

①-2 自分の志向性タイプ

その中で最も興味のある学問は…

学部・学科調べワークシート (表面)

HRNO () NAME ()

①-1 興味・関心のある学問系統

その中で最も興味のある学問は…

②-1

【何が学べるか】

【学んでおきたい教科・科目】

【めざす資格・受験資格など】

【主な活躍の場】

ねらい

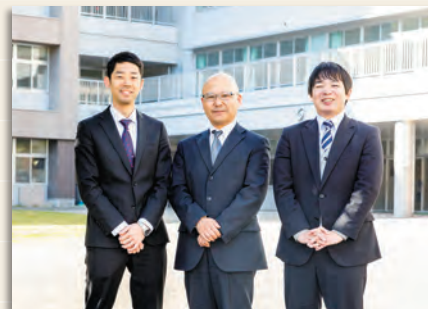
2年次6月の学部・学科調べで活用。初めて志望校を記入する7月の模擬試験に向けて、大学・学部・学科選択への意識を高めるとともに、夏季休業中に参加するオープンキャンパスの事前準備につなげることをねらいとしている。

課題

- 1 進路情報誌の内容を書き写すだけの取り組みにとどまり、進路観の醸成につながっていない生徒が見られる。
- 2 オープンキャンパスなど、その後の活動とのつながりが、教師、生徒ともに見えにくい状態にある。

改良会議実施校

静岡県立 下田高校



進路指導主事
稲葉 渉
いなば・わたる

教職歴24年。同校に赴任して2年目。2017年から3回、本コーナーに登場している。



1学年担当
鈴木翔太
すずき・しょうた

教職歴9年。同校に赴任して4年目。



2学年担当
佐々木裕己
ささき・ゆうき

教職歴5年。同校に赴任して4年目。

静岡県立下田高校

◎静岡県立下田北高校と静岡県立下田南高校が統合し、2008年、静岡県立下田高校となる。「至誠・雄飛・献身」を校訓とし、知・徳・体の人間教育、開国の町・下田にふさわしい国際感覚の育成にも力を入れる。

◎設立 2008(平成20)年

◎形態 全日制、定時制/普通科・理数科/共学

◎生徒数 1学年約210人

◎2019年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、千葉大、横浜国立大、静岡大、奈良女子大、広島大などに45人が合格。私立大は、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ218人が合格。

◎URL <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/shimoda-h/>

*プロフィールは2020年3月時点のものです。

2年生 学部・学科調べワークシート

After



ワークシートの問いを、面談での活用を前提にして、担任や保護者に伝えたいポイントを考えて、自分事として書こうという生徒の意識を高められるように思います。本校は、生徒との距離がよい意味で近い若い教師が多く、面談も活発に行われているので、本校の特徴に合ったツールになったと思います。



「オープンキャンパスで教授に質問してみたいこと」など、シート記入後の活動につなげたのはポイントの1つです。私のクラスでこのシートを使う時は、「4年間の大学生活のイメージ」「履修できる講義や実習」など、より具体的な大学選択に近づけるような項目も盛り込みたいです。



学部・学科の概要を調べるだけでなく、そこで自分が学んだら、何ができるようになるのか、自分の将来に結びつけられる問いにしたのがよかったと思います。元のシートもそうしたことを意図していたのですが、もっとそのねらいにふさわしいアプローチがあったことに気がつきました。

表面は自分の興味・関心に基づいて記入し、裏面は適性検査でマッチング度合いが高いと診断された学問系統について調べ、記入する。興味・関心と適性検査の結果が一致した場合は、興味・関心のある分野に近接する学問系統について調べて記入する。

興味・関心のある学問系統

その中で最も興味・関心のある学問

①学問内容について考える(担任や保護者などに伝えたいポイントを考えて書こう)

どのようなことが学べるか

その中で自分が学びたいことは何か、それはなぜか

自分事にしよう

シートに記入した内容を基に、担任と面談をしたり、三者面談で保護者に説明したりするなど、他者に伝えることを意識して書かせる。

②大学卒業後の生き方について考える(担任や保護者などに伝えたいポイントを考えて書こう)

①で記入した学問内容は、社会のどのようなこととどうつながっているか(身につく力、関係の深い職業や資格はどのようなものだろうか)

①で記入した学問内容を学ぶことで、何ができるようになりたいか(自分のために・大切な人のために・社会のために、などの観点から書こう)

自分事にしよう

③クラスの仲間と考えを深める

同じ学問系統の志望者を始め、仲間に聞いてみたいこと

聞いた結果、分かったこと、新たに知ったこと

仲間とともに深める

④上記①②にふさわしい大学への見通しを持つ(書ける人は大学名を記入)

大学のオープンキャンパスで教授や大学生に質問してみたこと

教授や大学生からの回答、または、オープンキャンパスに参加して興味を持った授業・ゼミなど

実際に調査

大学名まで書ける生徒には、その大学を選んだ理由を面談で聞く。オープンキャンパスでの質問項目は、生徒同士の話し合いの中で考えさせてもよい。

改良ポイント

- 1 興味・関心のある学部・学科の概要だけでなく、「そこで何を学びたいのか」「それを学ぶことで、何ができるようになりたいのか」と、生徒自身の見通しを記入させるようにする。
- 2 同じ学問系統を志望する生徒同士で話したいことや、オープンキャンパスで調べたいことを記入させるとともに、その活動後の気づきも記入させる。

どのような対話を通じて改良できたのかは、次ページで!!



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

実録

改良会議

先生方の
対話のダイジェスト生徒が進路を「自分事」として捉え、
行動を起こせるように
問いを見直し、面談につなげる

「自分は」というフィルターで進路を問う

佐々木 今年度、「学部・学科調べワークシート」を活用しましたが、進路情報誌の内容をシートに書き写すだけの生徒もいました。作業で終わらせないためには、もう少し工夫が必要だと感じました。

河野 まず、シートのねらいを確認しましょう。

稲葉 限られた範囲の知識や経験を基に進路を決める傾向が生徒にはあります。興味のある学部・学科だけでなく、適性検査で薦められた学部・学科も調べさせているのは、ほかの選択肢があるかもしれないと、生徒の考えを揺さぶるためですね。6月という活用時期には、初めて志望校を記入する7月の模擬試験と、夏季休業中に参加するオープンキャンパスの事前準備という意図もあるはずです。

鈴木 「2年生になったばかりの生徒が取り組むには、ちょっと雰囲気は堅苦しいかも」と感じました。生徒が主体的に取り組みたくなる要素を盛り込みたいと思います。現状のシートは事実を調べて書くことを求めている問いかけなので、もっと自分事とし

て考えられる問いかけになれば、取り組みの姿勢も変わってくるのではないのでしょうか。

河野 「『自分事』として考えられる」というのは、改良のポイントになりそうですね。

稲葉 学部・学科を「自分事」として掘り下げたために聞きたいのは、「君はそこで何を学びたいのか、それを学ぶことで、何ができるようにしたいのか」です。生徒に「自分は」という観点で考えさせる問いが必要です。

佐々木 進路を自分事として考えることで、目的意識が明確になれば、自分に必要なことをメタ認知して学習を行う「受験生としての自覚」を芽生えさせることにもつながると思います。

「見通し」が受験生としての自覚を促す

河野 「受験生としての自覚」を促すために、これまでどのような指導に力を入れてきましたか。

佐々木 受験生として自走できるようにするために、まずは学習習慣の確立に向けてしっかりと手をかける必要があると考え、生徒との面談を頻繁に



改良会議ファシリテーター



VIEW21編集部
高領域担当責任者
河野仙一
こうの・せんいち

「今回、初めての試みとして、校内で改良会議を行いました。こうした時間を捻出するのが難しい一方で、先生方は校内での議論を渴望していたのではないかと思います。苦吟を重ねた約3時間の会議が『あつという間だった』という先生方の言葉が印象に残っています」

改良会議を振り返って



今回の対話の中で、自分にはなかった視点を得られました。指導ツールだけでなく、教師としての自分の「あたり前」を、時間の許す限り揺さぶり、見直していきたいです。

対話する中で、自分の意見が深まったり、変わったりしたのは面白かったです。こういった対話の場を、教科や分掌の中で少しずつ広げ、いろいろな先生を巻き込みたいです。

新課程に向けて、探究学習を軸にしたグラウンドデザインの作成に取り組みたいと考えています。そのために、今回のような対話を通じて、「チーム下田」を模索していきます。



鈴木 それは、よい活用の仕方ですね。生徒の成長を促すだけでなく、受験に対する保護者の意識を高めることもできそうです。

鈴木 それは、よい活用の仕方ですね。生徒の成長を促すだけでなく、受験に対する保護者の意識を高めることもできそうです。

稲葉 見通しは自走化に欠かせないものです。シートでも、「自分は何を学び、何ができるようにしたいのか」という先の見通しを問うことが重要です。そうした問いかけを、シートだけではなく、面談などでも繰り返していきたいですね。三者面談の場で、シートの内容を基に、生徒に進路の見通しを披露させるのもよいでしょう。

鈴木 私が心がけたのは、模擬試験や校内テストの返却時に、成績に一喜一憂させずに、次の目標を設定し、計画を立てさせることでした。次の見通しを持って動く習慣を身につけさせたかったからです。

実施してきました。進路上の興味・関心だけではなく、学習状況などについて、担任するクラスの生徒は2か月に1度は私と語り合います。

河野 シートの運用面でも、進路に対する生徒の視野を広げる工夫ができそうでしょうか。

稲葉 生徒をグループにして、シートの内容を共有するという仕かけは、効果的だと思います。

佐々木 ただ、現時点での成績では達成が難しい高い目標を掲げている生徒にとっては、自分の志望を同級生に伝えるのは抵抗感があるかもしれません。

鈴木 目標に見合った努力をしているかどうかを内省する機会をつくる意味でも、私は生徒同士で志望を語り合うことに価値があると考えます。授業などで意見や感想を語り合うことが増えていきますから、それほど抵抗感はないようにも思います。

稲葉 意見が分かれましたが、語り合う中でこそ、運用上の留意点が浮き彫りになるはずです。我々も視野を広く持ち、指導を追究していきたいでしょう。

河野 シートの運用面でも、進路に対する生徒の視野を広げる工夫ができそうでしょうか。

稲葉 生徒をグループにして、シートの内容を共有するという仕かけは、効果的だと思います。

佐々木 ただ、現時点での成績では達成が難しい高い目標を掲げている生徒にとっては、自分の志望を同級生に伝えるのは抵抗感があるかもしれません。

鈴木 目標に見合った努力をしているかどうかを内省する機会をつくる意味でも、私は生徒同士で志望を語り合うことに価値があると考えます。授業などで意見や感想を語り合うことが増えていきますから、それほど抵抗感はないようにも思います。

稲葉 意見が分かれましたが、語り合う中でこそ、運用上の留意点が浮き彫りになるはずです。我々も視野を広く持ち、指導を追究していきたいでしょう。

河野 シートの運用面でも、進路に対する生徒の視野を広げる工夫ができそうでしょうか。

稲葉 生徒をグループにして、シートの内容を共有するという仕かけは、効果的だと思います。

佐々木 ただ、現時点での成績では達成が難しい高い目標を掲げている生徒にとっては、自分の志望を同級生に伝えるのは抵抗感があるかもしれません。

鈴木 目標に見合った努力をしているかどうかを内省する機会をつくる意味でも、私は生徒同士で志望を語り合うことに価値があると考えます。授業などで意見や感想を語り合うことが増えていきますから、それほど抵抗感はないようにも思います。

稲葉 意見が分かれましたが、語り合う中でこそ、運用上の留意点が浮き彫りになるはずです。我々も視野を広く持ち、指導を追究していきたいでしょう。

河野 シートの運用面でも、進路に対する生徒の視野を広げる工夫ができそうでしょうか。

稲葉 生徒をグループにして、シートの内容を共有するという仕かけは、効果的だと思います。

佐々木 ただ、現時点での成績では達成が難しい高い目標を掲げている生徒にとっては、自分の志望を同級生に伝えるのは抵抗感があるかもしれません。

鈴木 目標に見合った努力をしているかどうかを内省する機会をつくる意味でも、私は生徒同士で志望を語り合うことに価値があると考えます。授業などで意見や感想を語り合うことが増えていきますから、それほど抵抗感はないようにも思います。

稲葉 意見が分かれましたが、語り合う中でこそ、運用上の留意点が浮き彫りになるはずです。我々も視野を広く持ち、指導を追究していきたいでしょう。

対話を通して自校の指導を磨き上げる

改良したいのに、どうすべきか分からない……

指導ツールを募集しています！

「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材で検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①～④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒情報が削除されているかご確認ください

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容（目的・活用時期・活用方法）
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集をご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。（株）ベネッセコーポレーション CPO（個人情報保護最高責任者）
上記をご承諾くださる方はご送信ください。



SDGsの
視点で見る
大学の学び

全体概観

数値目標にとらわれすぎず、 一歩でも前進させる取り組みを

SDGsは、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標として、2015年9月の国連サミットで採択された。それは未来の社会を担う高校生にも向き合ってほしい課題であり、社会と自分とのかかわりや、探究学習の研究テーマを考えるきっかけとして、SDGsに着目させる高校が増えている。そうした取り組みが生徒の主体的な大学選択にもつながるよう、今号から、SDGsの視点で大学の学びや研究を紹介する連載をスタートする。

初回は、SDGsの達成度を評価する指標の開発に携わる九州大学工学研究院の馬奈木俊介主幹教授に、SDGsの基本的な内容について解説していただいた上で、馬奈木主幹教授の研究室が取り組むSDGsに関連する研究内容を学部生が紹介する。

SDGsの背景

MDGsの課題を受けて 国連でSDGsを採択

SDGsは「Sustainable Development Goals」の略称で、日本語では「持続可能な開発目標」と訳されています。経済・社会・環境に関する17の目標と169のターゲットで構成されており、今の社会をよりよくするだけでなく、その社会を子や孫などの未来の世代まで持続可能(Sustainable)にすることを目指しています。2015年9月の国連サミットで、30年までに国際社会が達成すべき目標として、加盟国193か国の同意を得る形で

採択されました。

それまで、国際社会は、2000年に国連で採択されたMDGs(Millennium Development Goals:ミレニアム開発目標)に取り組んでいました。15年を達成期限として掲げられた8つの目標(図1)は、途上国が抱える問題の解決が中心であり、途上国の人々の安全保障や生活水準の向上などを目指した内容でした。その達成に向けた取り組みを、先進国が資金面・技術面から支援してきました。

その結果、途上国における貧困率の半減、初等教育の就学率の上昇、HIV感染者の大幅な減少といった大きな成果が得られました。その一

方で、学校が建てられても教育水準が低いままだったり、支援が行き届かない農村部で都市部との格差が生じたりするなど、質の部分で課題が残りました。また、国連が支援に投じた費用は莫大であり、それに相応した成果が得られているのかといった疑問の声もあり、国際援助のあり方が改めて問われていました。

そうした成果と課題を受けて、MDGsの達成期限後の15年から、国際社会の課題にどのように向き合っていくのか、各国の代表者や専門家が参加した会議で様々な視点からの議論がなされ、その結果が17の目標と169のターゲットとしてまとめられました(図1)。

解説者



九州大学工学研究院 主幹教授
都市研究センター長

馬奈木俊介 まなぎ・しゅんすけ

専門分野は、都市計画学、交通工学、技術システム工学、環境・エネルギー経済学、産業組織論。九州大学大学院工学研究科修士課程修了、アメリカ・ロードアイランド大学大学院博士課程修了。博士(経済学)。東北大学大学院准教授等を経て、2015年から現職。国連「新国富報告書2018」代表、国連「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」代表執筆者などを務める。

*プロフィールは2020年3月時点のものです。

図1 MDGs (ミレニアム開発目標) と、SDGs (持続可能な開発目標)

MDGs (ミレニアム開発目標) の8の目標と、主なターゲット—— 2015年までの達成目標

- 目標1 極度の貧困と飢餓の撲滅…1990年から2015年までに、1日1.25ドル未満で生活する人々の割合を半減させる。
- 目標2 初等教育の完全普及の達成…2015年までに、すべての子どもたちが、男女の区別なく、初等教育の全課程を修了できるようにする。
- 目標3 ジェンダー平等の推進と女性の地位向上…できれば2005年までに初等・中等教育において男女格差を解消し、2015年までには、すべての教育レベルで男女格差を解消する。
- 目標4 乳幼児死亡率の削減…1990年から2015年までに、5歳未満児の死亡率を3分の2に引き下げる。
- 目標5 妊産婦の健康状態の改善…1990年から2015年までに、妊産婦の死亡率を4分の3に引き下げる。
- 目標6 HIV/エイズ、マラリア、その他疾病の蔓延防止…2015年までにHIV/エイズの蔓延を阻止し、その後、減少させる。
- 目標7 環境の持続可能性の確保…2010年までに、生物多様性の損失を抑え、損失率を大幅に引き下げる。
- 目標8 開発のためのグローバル・パートナーシップの構築…後発開発途上国の特別なニーズに取り組む。

*国連総合広報センターのウェブサイト (<https://www.unic.or.jp>) を基に編集部で作成。

MDGsを引き継いで、各国の代表や専門家らが様々な視点で議論

SDGs (持続可能な開発目標) の17の目標—— 2030年までの達成目標

<p>1 貧困をなくそう</p> <p>1. 貧困をなくそう</p> <p>あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。</p>	<p>7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに</p> <p>7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに</p> <p>すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する。</p>	<p>13 気候変動に具体的な対策を</p> <p>13. 気候変動に具体的な対策を</p> <p>気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる。</p>
<p>2 飢餓をゼロに</p> <p>2. 飢餓をゼロに</p> <p>飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する。</p>	<p>8 働きがいも経済成長も</p> <p>8. 働きがいも経済成長も</p> <p>包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用 (ディーセント・ワーク) を促進する。</p>	<p>14 海の豊かさを守ろう</p> <p>14. 海の豊かさを守ろう</p> <p>持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する。</p>
<p>3 すべての人に健康と福祉を</p> <p>3. すべての人に健康と福祉を</p> <p>あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。</p>	<p>9 産業と技術革新の基盤をつくろう</p> <p>9. 産業と技術革新の基盤をつくろう</p> <p>強靱 (レジリエント) なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る。</p>	<p>15 陸の豊かさも守ろう</p> <p>15. 陸の豊かさも守ろう</p> <p>陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、並びに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。</p>
<p>4 質の高い教育をみんなに</p> <p>4. 質の高い教育をみんなに</p> <p>すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。</p>	<p>10 人や国の不平等をなくそう</p> <p>10. 人や国の不平等をなくそう</p> <p>各国内及び各国間の不平等を是正する。</p>	<p>16 平和と公正をすべての人に</p> <p>16. 平和と公正をすべての人に</p> <p>持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。</p>
<p>5 ジェンダー平等を実現しよう</p> <p>5. ジェンダー平等を実現しよう</p> <p>ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う。</p>	<p>11 住み続けられるまちづくりを</p> <p>11. 住み続けられるまちづくりを</p> <p>包摂的で安全かつ強靱 (レジリエント) で持続可能な都市及び人間居住を実現する。</p>	<p>17 パートナーシップで目標を達成しよう</p> <p>17. パートナーシップで目標を達成しよう</p> <p>持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化させる。</p>
<p>6 安全な水とトイレを世界中に</p> <p>6. 安全な水とトイレを世界中に</p> <p>すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。</p>	<p>12 つくる責任つかう責任</p> <p>12. つくる責任つかう責任</p> <p>持続可能な生産消費形態を確保する。</p>	<p>*総務省のウェブサイト (https://www.soumu.go.jp/) を基に編集部で作成。</p>

SDGsの特徴

指標の枠組みを示し、達成度の可視化を図る

SDGsの大きな特徴は、先進国・途上国を問わず、国際社会が達成を目指すべき目標が掲げられたことです。MDGsは、途上国の開発支援を目的とした目標が中心でしたが、経済や社会、環境の問題は、世界全体の課題として取り組むべきという考えが示され、包括的かつ普遍的な目標が立てられました。

そして、まずは達成すべき目標を決めた上で次に検討されたのが、取り組みの進捗を評価する方法です。数値で測れることが明確な目標だけを設定していたら、数値で測ることが難しい「質」などは、目標に設定できなくなってしまうからです。MDGsでは取り組みの評価が曖昧だったという反省から、私が参加した科学者の専門家会議では、「質」で分かる数値目標を明確に設定しなければ評価できず、成果のある活動を期待できない」と訴え続けました。そうした考えが反映された形となりました。

そして、SDGs採択の2年後の

17年7月、国連会議で、232の指標の枠組み(図2)が承認され、目標達成度を測る基準が示されました。

SDGsの仕組み

国・地域の事情に応じた指標を設定して活動を推進

SDGsの目標・ターゲット・指

図2 SDGsの目標、ターゲット、指標の例「目標11 住み続けられるまちづくりを」から抜粋

目標	ターゲット	指標
目標11 包摂的で安全かつ強靱(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する。	11.1 2030年までに、すべての人々の、適切、安全かつ安価な住宅及び基本的サービスへのアクセスを確保し、スラムを改善する。	11.1.1 スラム、インフォーマルな居住地及び不適切な住宅に居住する都市人口の割合
	11.2 2030年までに、脆弱な立場にある人々、女性、子ども、障害者及び高齢者のニーズに特に配慮し、公共交通機関の拡大などを通じた交通の安全性改善により、すべての人々に、安全かつ安価で容易に利用できる、持続可能な輸送システムへのアクセスを提供する。	11.2.1 公共交通機関へ容易にアクセスできる人口の割合(性別、年齢、障害者別)

*国連統計部が公表した指標の総務省による仮訳を基に編集部で作成。

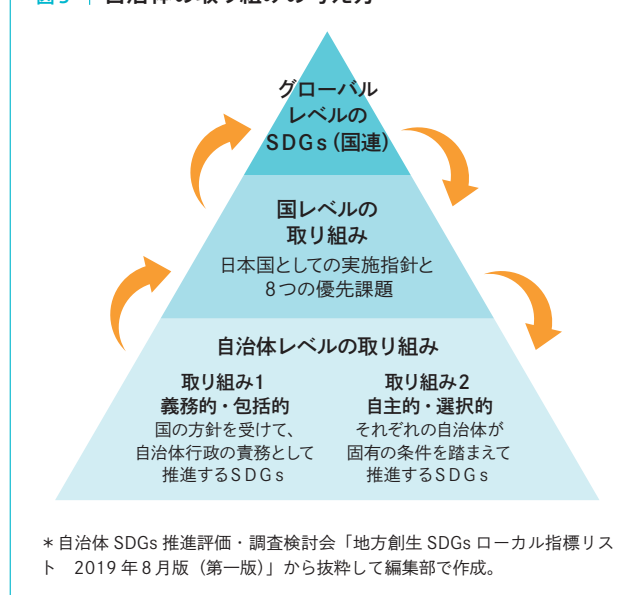
標は、グローバルレベルで示されたものであり、そのままでは国・地域のレベルにおいて活動しにくい内容です。そこで、国・地域の事情を踏まえた目標や指標などを設定して、活動に取り組みむことになっています。

日本では、16年5月、内閣に「持続可能な開発目標(SDGs)推進本部」を設置し、中・長期的な国家戦略の下、SDGs達成に向けて動いています。19年8月には、グローバルレベルの指標を自治体レベルの活動に落とし込む(図3)ための「地方創生SDGsローカル指標リスト」(図4)が示され、自治体がSDGsに関する取り組みを進捗管理しやすくなりました。

SDGsでは、各国が目標達成に向けて着実に行動できるよう、達成度を測る仕組みを整備した上で、各国に活動と評価の報告を義務化しました。自国に評価のノウハウがなければ、それを請け負う自国外の企業やシンクタンクを公募で探すこともできます。

なお、SDGsの達成期限は30年であり、その時には次の新たな15年目標が、持続可能な発展の内容をさらに進化させて提案されるでしょう。

図3 自治体の取り組みの考え方



SDGsの意義

国・自治体・企業・個人が同じ目標に向かって進む

17の目標は、どれも普遍的な内容ばかりです。「きれいごと過ぎる」といった批判的な意見もあります。が、私は「国連」が掲げたことに意義があると考えています。

以前は、企業が社会貢献活動をしようにしても、「自社には関係ない」と、社内で理解が得られにくい状況でした。しかし、国連のお墨つきを得たことで、企業は本業以外でもそ

うした活動を実行しやすくなりました。さらに、国際的な社会貢献になるSDGsへの取り組みは、企業価値を高める指標として、社会に浸透してきました。SDGsに関する製品やサービスの提供、業務改善に熱心に取り組む企業が増えています。

自治体も、SDGsの達成に向けた施策を打ち出すとしています。人口減少や経済規模の縮小など、自治体が抱える課題はSDGsと重なり、取り組みの方向性が一致するからでしょう。

そして、普遍的な目標であるSDGsは、私たち一人ひとりにも深くかわりがあります。例えば、日本でも一人親世帯や非正規雇用者、高齢者などにおける貧困問題は深刻です。そのように途上国だけの問題ではなく、私たちの身近な問題としてもSDGsに目を向け、その解決のために行動することが大切です。

図4 日本の自治体がSDGsの取り組みの進捗を計測するための指標リスト

目標13 気候変動に具体的な対策を——気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる

ターゲット	グローバル指標	ローカル指標(案)	データ入手可能性	データソース
13.3 気候変動の緩和、適応、影響軽減及び早期警戒に関する教育、啓発、人的能力及び制度機能を改善する。	13.3.1 緩和、適応、影響軽減及び早期警戒を、初等、中等及び高等教育のカリキュラムに組み込んでいる国の数	13.3.1 公民館における環境保全活動の実施数(環境保全活動の実施数/公民館数)	都道府県	文部科学省「社会教育調査」
	13.3.2 適応、緩和及び技術移転を実施するための制度上、システム上、及び個人々人における能力構築の強化や開発行動を報告している国の数	13.3.2.1 地球温暖化対策推進法に基づく地方公共団体実行計画(区域施策編)の策定有無	市区町村	環境省「地方公共団体実行計画(区域施策編)策定支援サイト」
		13.3.2.2 温暖化対策地方実行計画に	都道府県	国立環境研究所「気候変動

*自治体SDGs推進評価・調査検討会「地方創生SDGsローカル指標リスト 2019年8月版(第一版)」から抜粋して編集部で作成。

一つひとつの取り組みの成果は小さくても、行動しなければ目標は達成できません。住民、企業、自治体の行動が積み重なって、持続可能でよりよい世界に近づけるのです。

高校教師・高校生に知ってほしいこと
複数の目標が絡み合っている社会は成り立っている

SDGsの概要を説明してきましたが、ターゲットや指標はもちろん17の目標の内容を、高校生が詳しく知る必要はありません。17の目標は、一つひとつが独立した目標ではなく、2つ以上が関連していることを理解していれば十分です。例えば、木を適切に伐採して森林を保全することは、河川の水質改善と、その水が流れ込む海の豊かさにつながり、目標6、14、15に関係すると言えます。

そうした関係性を理解する取り組みには、例えば、自分が関心のあるターゲットを1人1つずつ選び、そのターゲットにおける日本や世界の状況を調べ、その達成には他のどの目標やターゲットが関係するのかを考えてまとめて、発表する活動が挙げられます。1クラス40人いれば、

40通りの目標・ターゲット間の関係性が見えてくるでしょう。

高校の授業では、各教科・科目の学びと社会問題との関係に着目した話をする時、生徒のSDGs理解につながると思います。そうした視点でいろいろな教科・科目の教師の話や教科・科目が関係していること、生徒は気がつくでしょう。

また、数値目標の重要性を強調してきましたが、数値にとらわれすぎず行動しないのは本末転倒です。目標の1割しか達成しそうになくても、行動しなければ達成度はゼロです。目標に一步でも近づく活動ならば、取り組むべきだと考えます。

達成期限の30年まであと10年。日本は諸外国と比較すると、相対的には成果を上げていると思います。ただ、多くを同じように進めようとしてきているので、優先順位をつけるべきだと考えています。将来の世代のことを考えた取り組みを推進できよう、私も1人の研究者として力を尽くしていきます。

Column SDGsを評価する指標を開発

SDGsに関する取り組みを総合的に評価する方法として、国連が採用を検討しているのが、ノーベル経済学賞受賞者のケネス・アロー氏らによって開発された「新国富指標」です。それは、国や都市の総合的な豊かさを、「自然資本」「人的資本」「人工資本」の3つの指標で数値化して測ります(下図)。それらの指標を正確に測ることは難しかったのですが、科学的な計測手法や資本推計のための経済学的手法の発展によって、測定が可能になりました。

私は、「新国富指標」に関する国連の報告書の代表を務めました。大学時代には土木と環境、大学院時代には経済学を学び、それらの分野を横断したテーマを研究してきた実績から、複数の分野がかわる指標の開発に適任と評価されました。現在は、福岡県久山町、宮若市や直方市などと協定を結び、「新国富指標」を活用したまちづくりを進めています。また、中国やインドから依頼を受け、「新国富指標」による評価報告もまとめました。そのように、指標としての実績を積み重ね、ほかの自治体にも広めていき、5年後、10年後に、世界の国々が使える指標に発展させることを目指しています。





SDGsの
視点で見る
大学の学び

実社会の課題に取り組み 自治体と連携した研究で、 持続可能なまちづくりを目指す

九州大学 工学部 地球環境工学科 建設都市工学コース
都市・交通工学研究室

道路や下水、防災など 「まちづくり」が研究テーマ

九州大学工学部地球環境工学科は、自然と人間社会が調和した新しい環境の創造を目指し、建設都市工学・船舶海洋システム工学・地球システム工学の3コースが設置されて

私たちが紹介します



建設都市工学コース
都市・交通工学研究室4年
天川 航
あまかわ・わたる
東京都立日比谷高校卒業
大学院に進学予定



建設都市工学コース
都市・交通工学研究室4年
土居海斗
どい・かいこ
広島県・私立盈進中学校高校
卒業。大学院に進学予定

いる。学生は2年生進級時に、専攻するコースを選ぶ。

建設都市工学コースでは、道路や橋、下水、港などの社会基盤の構築、それに関連する地盤や防災などが専門分野となる。SDGsの「目標11 住み続けられるまちづくりを」に直結する研究ができるコースであり、3年次の必修科目「プロジェクトまちづくり」では、同大学が連携協定を結ぶ福岡県直方市にある町屋の活用を提案するPBL（*1）に取り組む。同コース4年の天川航さんは、10人1組で行ったこの活動で、まちづくりの難しさを経験したと語る。

「町屋を改装し、カフェを併設した宿泊施設を提案したところ、住民から改装費用の捻出や集客の見込み

などについて、様々な指摘を受けました。まちづくりには多様な視点が必要なのだと実感しました」

新公共交通の効果測定し、自治体の施策立案に貢献

4年次には研究室に所属し、学生自身がテーマを設定して研究する。馬奈木俊介主幹教授が率いる都市・交通工学研究室では、都市が直面する多岐で複雑な問題に、都市工学や経済学などから多面的・学際的にアプローチする。同研究室所属の天川さんは、同大学と共同でまちづくりを進める福岡県宮若市が、自動運転バスによるオンデマンド交通システム（*2）を導入した際の住民の満

この学びに関する主なSDGsの目標



包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現する。



足度を、金銭的価値に置き換えて検証する研究を行った。20年末に開始予定の実証実験に向けたエビデンスを得ることが、研究の目的だ。

「現在のコミュニティーバスは、利用者にとって、経路や時刻が固定されるといった不便な点があり、また、運転手不足という課題もありました。誰もが利用しやすい公共交通が整備されれば、高齢者の外出を促すことにつながり、健康促進（目標3）や地域経済の活性化（目標9）にも貢献します」（天川さん）

市の担当者を通じて分析に必要な衛星画像を入手し、それを使ったアンケート調査を住民に実施。データが古ければ、より新しいデータがないか、市の担当者に交渉した。分析

*プロフィールは2020年3月時点のものです。

*1 Problem Based Learning、あるいはProject Based Learningの略。問題解決型学習のこと。

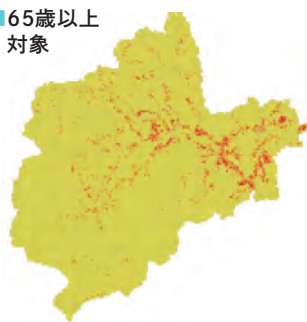
*2 予約があった時のみ運行する公共交通。利用者の要望に応じて運行ルートやダイヤを設定し、乗り合って運行する。

に必要なデータがなければ、使えるようなデータを探し、より使いやすくなるように加工もしたという。

「検証の結果、65歳以上では、世帯年収の36%に相当する満足度(図)となり、公共交通が発展すれば幸福度は上がると分かりました。施策に直結する自治体との共同研究はやりがいがあり、公共交通を発展させて環境に優しいまちをつくりたいという思いを強くしました」(天川さん)

新公共交通システムの導入後の住民満足度(福岡県宮若市)

■65歳以上対象



左図は、新公共交通システムの導入で、宮若市のバスサービスに対する不満が完全に解消された場合の65才以上の住民の満足度を、金銭に換算して地図に示したものだ。金銭換算価値は最大約2400万円で、凡例では、それを10色に区分。赤に近いほど満足度が高く、黄に近いほど満足度が低い。その結果を人口密度や既存のバス路線と照合すると、人口が多い地域や既存のバス停から遠い地域ほど色が赤く、新公共交通システムの効果が大きいことが分かった。

*天川さん提供資料を基に編集部で作成。

SDGsの達成につなげるための企業の行動を分析

自治体などに施策提言も行う同研究室では、経済学も主要な研究分野であり、その一つがESG投資だ。環境(Environment)と社会(Social)に配慮し、健全に統治(Governance)されている企業は、SDGsへの貢献によって企業価値を高め、同時に収益も上げる持続可能性が高いことから、投資家に注目されている。4年の土居海斗さんは、社会と統治の視点から、不祥事などのマイナスイ情報を開示するか否かの企業方針が投資家の行動にどんな影響を及ぼすのか、国内外約3000社のデータを収集して分析した。

「SDGsの達成には企業の力が重要です。企業にもそれにかかわる利点とリスクを伝えることが、積極的な行動に結びつくと考えます(目標9)。研究では、マイナスイ情報を開示した企業と開示していない企業の特徴を理解しながら、集めた情報を一つひとつ整理し、様々な角度からのデータがより精緻な情報提供になると考えて分析しました」(土居さん) その結果、企業の持つリスクと株



写真 研究室では、定期的集まり、各自の研究の進捗状況を報告。写真は、ESG投資とSDGsの関係についての研究を報告する土居さん。

取引の出来高の相関が高い企業ほど、不祥事を隠したがる傾向にあることが分かった。企業はリスクを軽減した上で投資家の行動を予想し、それを踏まえて自らの価値を高める企業活動をするのがよいという。

「この研究室に入ってから分かったのは、まちづくりには工学だけでなく経済学の視点も必要で、知識があればあるほど緻密に考えた上で、よりよいまちが築けるということです。3年生までは社会基盤の視点からまちを捉えていましたが、経済学を学んだことは、人や企業の行動を理解する点で、自分にとって大きなプラスになりました」(土居さん) 研究を始めてからSDGsをより意識するようになったと語る2人。大学卒業後は大学院に進学し、同研究室で研究を続けていく。

学びとSDGs

まちづくりで人々のWell-beingを高めよう



都市・交通工学研究室 主幹教授
馬奈木 俊介
まなぎ・しゅんすけ

これまでの都市計画の多くは、国や自治体と考え、整備してきました。そこには、国や自治体が、地域や住民の需要を熟知しているという前提があったからです。ところが、近年は、多額の費用を投じて建設しても利用者が少ない高速道路があるなど、需要と供給が一致しないケースが出てきました。

もちろん、ただ住民の意見を反映させればよいというわけではありませぬ。まちは、今の世代だけでなく、子や孫、その先の世代のことまでを考えてつくるのが大事だからです。本研究室は、潜在的なニーズにも応え、持続可能なまちづくりを実現し、住民のWell-beingを長期的に高めることを目指した研究を行っています。

研究のほとんどが国や自治体と連携して進めるものであり、学部生も社会の問題と日々向き合っています。一つの自治体のまちづくりに関することを分担して研究し、積み上げた成功事例を、他の自治体や国にも広めていくことで、日本や世界における持続可能なまちづくりに貢献していきたいと考えています。



NEXTリーダーが
オンライン&オフラインで
集まり、語り合う

若手教師・教育創造MTG ミーティング

現場の思いを率直に語り合う若手会議、次号からスタート

新学習指導要領の実施まで残り2年となりました。移行措置として、「総合的な探究の時間」は、既に19年度入学生（現高校2年生）から始まっています。先生方にとっても、挑戦したいこと、検討すべきことが増える中で、特に若手の先生方から、「同僚・先輩に相談したいことがたくさんあるが、その時間が取れない」「日々の授業に追われ、授業力を高めたり、指導観を深めたりする機会がない」といったお声を伺うようになりました。そこで、次代を担う全国の若手教師たちが2～3か月に1回の頻度で、オンラインとオフラインで集まり、関心のあるテーマについて語り合う場をつくることにしました。そこでの語り合いの様子は、次号以降の本誌やベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでお伝えしていきます。今号は、参加予定の先生方にご回答いただいた事前アンケートから、語り合いたいことの一部を、テーマ別にご紹介します。

スケジュール

6～7月 1回目の会議の様子を、本誌6月号誌面またはベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（以下、ウェブサイト）でご紹介します。

8～9月 2回目の会議の様子を、本誌8月号誌面またはウェブサイトでご紹介します。

10～11月 3回目の会議の様子を、本誌10月号誌面またはウェブサイトでご紹介します。

2～3月 4回目の会議の様子を、本誌2月号誌面またはウェブサイトでご紹介します。

参加予定者

北海道、岩手県、宮城県、栃木県、埼玉県、神奈川県、富山県、福井県、三重県、大阪府、島根県、広島県、山口県、福岡県の公立高校教師14人、北海道、愛媛県の私立高校教師2人を予定。



明日の教育を牽引するネクストリーダーたちが地域を超えて、オンライン&オフラインで語り合います



語り合うのは「正解が1つではない」現場の課題や願い

1 授業について

- 主体的に学習に取り組む態度を育てるため、**ルーブリック**を活用した自己評価を授業に組み込もうと模索しています。また、思考・判断・表現力の育成を確実に実現し、身につけた知識を深い学びへとつなげる授業展開を追究したいです。
- 授業でICTを活用するにあたり、どのアプリケーションを導入するか、コスト面も含めて悩むことがたくさんあります。他校の先生方は、**どのような判断でどのアプリケーションを導入し、どのように活用しているのか**を知りたいです。
- 現在「**生徒がよく生きるための授業デザイン**」を探究・実践している最中です。教育の個別最適化が進む中で、他者と協働して分からないことを探究し、新しい価値を創り出し合いながら、よりよい人間関係を構築していくような授業のあり方について考えていきたいです。

2 探究学習について

- 「総合的な探究の時間」の定義を校内で共有しないまま、言葉だけが独り歩きしているようなことはないでしょうか。現状では、**目的・目標も明確でない「探究」活動を行っているケースもあるように感じ、違和感を覚えます。**
- 「総合的な探究の時間」について、校内のほかの先生方にその意義を理解していただくのに苦労しています。また、**探究学習を進める上で必要なファシリテーション技術の向上についても必要性を感じています。**
- 本校の生徒は、地域課題を題材にした探究学習に取り組んでいますが、生徒の提案は枠にはまったものが少なくありません。実際に近隣の企業・団体と協働しながら、**地域課題の解決に創造的に貢献するような探究活動にしていくためには、どのようなアプローチが有効なのか**について知りたいです。

3 特別活動、部活動について

- ホームルームがただの情報伝達の間だけになってしまっている気がします。学校行事を始め、生徒が、**高校生活全般へのモチベーションを上げるにはどうしたらよいのか**、いろいろな先生の意見や実践を聞きたいです。
- 既存の部活動をただ優先する考えから脱却し、**生徒の興味・関心を広げるために様々な経験を促すような環境づくりを進めたいです。**また、教師自身が、それぞれ多様な生き方の中、生き生きとした姿を生徒に見せることで、生徒自身が教師の姿を通して、「多様な生き方が許される」ことを感じ取るのではないかと思います。**生徒が本来持っている主体性や創造性を呼び起こす教師の振る舞いとはどのようなもののかも考えたいです。**

4 進路指導について

- 希望進路が不透明なまま3年生になってしまい、受験勉強のスタートがなかなか切れない生徒が多いのが本校の課題です。1年次からの進路探究活動や小論文学習、探究学習、模擬試験などの進路指導がバラバラで、結びついていないのが要因だと考えています。早期に進路目標（志）を定め、**進路実現に向けて自走できる生徒を育成するために、どの時期にどのような進路の仕かけが有効なのか**を学んでいきたいです。
- 夢や将来像を持たせるために、面談などでそれぞれの生徒の個性や興味・関心を把握するように努め、一人ひとりのキャリアを生徒とともに考えていこうとしています。しかし、**自分の中から将来への思いが湧き上がってくる生徒が少ないように見え、悩んでいます。**

上記のような課題や願いについて、若手教師が熱く語り合っています。
次号から始まる本コーナー、どうぞご期待ください。

新学習指導要領の実施に向けた準備が本格化する中、学校現場は様々な課題に直面することが予測される。本コーナーでは、実践事例や有識者インタビューなどを通じて、現場の疑問や課題を解決し、自校の実践につなげる情報を提供する。

テーマ

グランドデザインから考える 「総合的な探究の時間」の設計

はじめに

「総合的な探究の時間」の5つの課題に向き合う

- 2019年度から先行実施が始まった「総合的な探究の時間」。現場の教師に、その課題や取り組めていないことは何かを聞いた時、課題として挙げられるのが、次の5つだ。
- 1 教師により、指導ノウハウや指導に対する意識の差が大きい
 - 2 特定の教師に負荷が集中しており、学校全体に指導が定着しにくい
 - 3 評価の方法が分からない
 - 4 学習意欲への効果が見えづらい
 - 5 汎用的な資質・能力の育成につながついていない

こうした課題に向き合い、「総合的な探究の時間」の設計とその改善に取り組んできたのが、岡山県立林野高校だ。今回は、右の5つの課題を大きく「学校全体の取り組みにする方策」「生徒の意欲喚起と資質・能力の育成」の2つの課題とした上で、同校が課題をどのように乗り越えていったのかをひもといいていく。また、22年度からの指導要録の変更に伴う観点別学習状況評価の導入に向けた同校の構想もレポートする。

実践事例

学びの意義を捉え直して、
学校教育目標とひもづける

岡山県立林野高校

岡山県立林野高校では、2016年度から、カリキュラム・マネジメントの視点で教育活動の改善に取り組んできた。学校全体で「育てたい生徒像」を丁寧に語り合い、教育活動の軸となる生徒理解を深めながら、資質・能力ベースで各教科の教育課程の見直しを行った。20年積み重ねた伝統のある同校の「総合的な探究の時間」は、教育活動全体の中にどのように位置づけられ、展開されているのだろうか。

Q1 どうしたら、「総合的な探究の時間」が、
学校全体の取り組みになり、
一人ひとりの教師の負荷を最小限にできるか？

A1 「総合的な探究の時間」の認識を、
活動ベースから資質・能力ベースへ転換することが大切

瀬島先生 本校では2016年度、もちろん、生徒の様々な力を伸ばさせる学校だと自負がありました。

カリキュラム・マネジメントの視点
で、すべての活動を学校教育目標に
落とし込み始めました。本校は、約
十年前から地域課題研究に取り組
み、協働学習にも力を入れてきまし
た。部活動も盛んです。教科の力は

もちろん、生徒の様々な力を伸ばさせる学校だと自負がありました。しかし、「これが目指す生徒像だ」と教師が同じ言葉で語れたかと言えば、共通の認識、指標が不足していません。また、近年は、地域の中学生の数が減るなど、学校の存続に対

*プロフィールは2020年3月時点のものです。



校長
竹内 成長
たけうち・しげお
教職歴33年。同校に赴任して1年目。



指導教諭
瀬島 美穂
せじま・みほ
教職歴30年。同校に赴任して10年目。統括課長。理科。



2学年主任
吉川 英明
きつかわ・ひであき
教職歴15年。同校に赴任して3年目。地歴公民科。



「総合的な探究の時間」 担当
佐堂 幸代
さどう・ゆきよ
教職歴6年。同校に赴任して3年目。英語科。

岡山県立林野高校

◎20年の伝統がある「総合的な探究の時間」は、全教師がかかわり、連携して推進する。生徒は1人1台の「Chrome book」を所持し「Classi」を導入。情報活用能力や表現力の向上、教師の負担軽減にもつなげている。

◎設立 1908（明治41）年

◎形態 全日制／普通科／共学

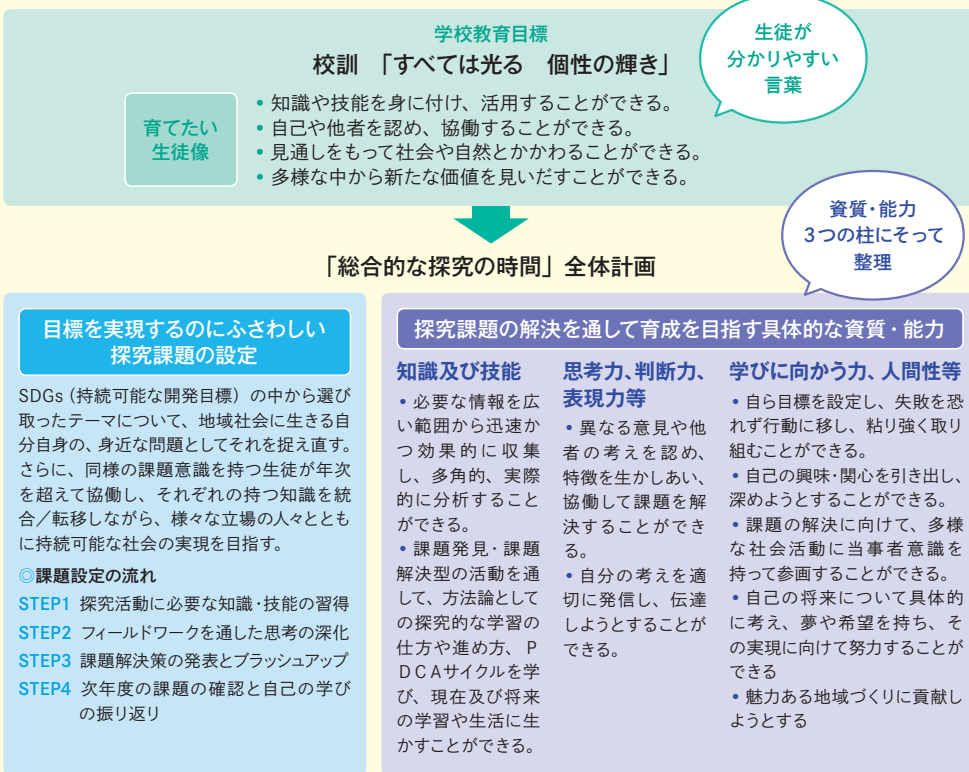
◎生徒数 1学年約140人

◎2019年度入試合格実績（現役のみ）

国立大は、静岡大、鳥取大、岡山大、高知大、北九州市立大などに15人が合格。私立大は、立命館大、関西大、近畿大などに延べ75人が合格。

◎URL <http://www.hayasino-okayama-ed.jp/>

図1 林野高校の「総合的な探究の時間」



*学校資料を基に編集部で作成。

して教職員が強く危機感を抱いた時期でした。学校の強みは何か、求められる学校であるために何を目指すべきかを、すべての教職員が同じ言葉で語れるようになるため、どんな

生徒を育てたいかを全教職員で話し合っ整理し、足並みをそろえてきました。それによって、「総合的な探究の時間」だけでなく、全教科が、資質・能力をベースにした活動

になりました。

本校は、志望も学力も多様な生徒がいる学校です。授業は一方的な教え込みだけでは成立しません。各授業でどんな資質・能力を育成するのか、そこが明確になると我々の授業は変わり、生徒の姿勢も変わります。育てたい生徒像を全教師で共有したからこそ、授業のあり方、そして「総合的な探究の時間」のあり方も決まり、連携が強まったと思います。

竹内校長 本校には、「学校の教育活動はみんなだ」という伝統が教職員の中に育まれています。「総合的な探究の時間」は、全校生徒を5つのテーマごとに縦割りにして、全教師で指導にあたります。「みんなでやる」という学校の教師文化があるから、育てたい資質・能力も全教職員で話すことができたのだと思います。「自分は専門教科や部活動だけをやらばよく、『総合的な探究の時間』は関係ない」という考えにならず、結果として一人ひとりの負担を削減することにつながっています。協働的な教職員の風土づくりも、「総合的な探究の時間」を全校で進める上で、管理職の重要なテーマになると思います。

Q2 どうしたら、生徒の学習意欲を高め、 資質・能力の育成につなげることができるか？

A2 生徒の成長を後押しできるような、 多面的評価を充実させることが重要

佐堂先生 毎時間、活動内容だけではなく、何を学び、何が身についたのかをルーブリックで振り返らせ、成長が見える積み上げ型の評価をしてきました。教師は振り返りにコメントを丁寧に書き込み、生徒の弱いところを伸ばすヒントを与えています。20年度は、観点別学習状況評価の実施に向け、これまでの活動・ルーブリックを、資質・能力の3つの柱に沿って整理して、評価項目(図2)と年間指導・評価計画(図3)を作成しました。生徒は活動の途中で大きく変化しますから、ステップごとに多面的に生徒を励まし、一人ひとりの成長を支援していきたいです。

吉川先生 教育目標にひもづけ、資質・能力の3つの柱で整理したことで、生徒が何ができるようになるかを第一に考えられるようになりました。おかげで、「総合的な探究の時間」は、生徒主体の活動であると教師間で共通認識が持っています。評価項目は教師・生徒が共通して持ち、活用していくものになります。実際、教師が主導していく場面は近年大きく減り、生徒には「自ら学びに向かわないといけない」という意識が高まっています。教師の「こうなりたい」という思いと、生徒の「こ

図2 20年度「総合的な探究の時間」評価項目案(検討中・抜粋)

MDP活動を通してつきたい力・目指す姿		特に意識して活動するステップ	評価する観点
批判力	批判的に考える力 ④現状を分析し、目的や課題を明らかにできる	1・3	思考力・判断力・表現力
	⑤課題に対する複数の解決方法から、最もよいものを検討することができる	2・3・4	
	⑥既存の発想に固執せず、さらなる発展や新しい解決方法を考えようとする可以尝试	2・3・4	
計画力	学びの姿勢作り ⑦必要な情報や資料を得るための手段を考え、行動することができる	1・2・3・4	学びに向かう力・人間性等
	⑧活動を振り返り、今後の見通しを立てることができる	1・2・3・4	

「総合的な探究の時間」で生徒に身につけさせたい力・姿を評価項目として明確化している。評価項目は生徒と共有し、生徒は活動の度に成長が見える積み上げ式のグラフに記録していく。

*学校資料を基に編集部で作成。

図3 20年度「総合的な探究の時間」年間指導・評価計画(検討中・抜粋)

		4月	5月	6月	7月
		ステップ1	ステップ2		
探究プロセス		課題設定	情報収集 整理・分析	情報収集・整理 分析・まとめ	情報収集 整理・分析
知識・技能		考えるための技法、言語能力、情報活用能力など			
思考力・判断力・表現力		④	⑤ ⑥ ⑨ ⑩		
学びに向かう力、 人間性等	主体的に学習に取り組む態度	⑦ ⑧ ⑬ ⑭ ⑯ ⑰	⑦ ⑧ ⑬ ⑭ ⑯ ⑰ ⑳		
	上記以外	⑩ ⑪	⑪ ⑬		

「総合的な探究の時間」の活動を資質・能力ベースで整理していたが、そこで育んだ資質・能力を適正に評価する仕組みをつくるために、関西大学の黒上晴夫教授を招いた全教師参加の校内研修を実施した。

*学校資料を基に編集部で作成。

より詳しい内容は、

『ハイスクールオンライン』でお届けします！



動画解説



事例・解説

林野高校の指導事例・指導ツールを掲載

関西大学・黒上晴夫教授による「探究の在り方」動画解説

うなりたい」という思いでゴールを設定し、その成長を適切に評価していきたいです。だからこそ、どのよう

うに資質・能力が育まれているかを把握できる観点別学習状況評価の充実が求められていると思います。

うに資質・能力が育まれているかを把握できる観点別学習状況評価の充実が求められていると思います。

一疑問や課題を解決!実践につながる!

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』トップページ > 入試改革/新課程 からアクセス

4月中旬
リリース予定

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

VIEW21 新課程レポート PRESENTS

ベネッセ教育情報センター

7/3
開催

Webセミナーのご案内

生徒の前向きな学びを引き出す 指導デザイン

～新課程で求められる資質・能力を育成する指導と多面的評価～

新課程に向けて検討を進めていく中で、
指導や評価を具体的にどのようにデザインしていけばよいのかについて
お悩みの声を多くお伺いします。

今回のWebセミナーでは、そのようなお悩みに応えるべく、
新課程の情報整理や実践事例発表を予定しております。ぜひご参加ください。

◎開催日時 2020年7月3日(金) 14:30～17:00(予定)

◎形式 Webセミナー(ライブ配信)

*新課程を見据えた指導・評価について、学校全体で推進していくための工夫を、先進事例校にご発表いただきます。各学校にて、管理職、教務ご担当先生、進路ご担当先生など、複数の先生方で一緒にご参加いただけましたら幸いです。

◎参加費 無料

◎詳細・申し込み方法等

5月以降に改めてご案内いたします



お問合せ先

(株)ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 教育支援企画部 教育情報センター

TEL 0120-350-455 お客様サービスセンター

(受付時間/月～金 8:00～18:00 土 8:00～17:00 /祝日および年末・年始を除く)

2020年2月号へのご意見

自校に合った方法を検討する契機に

2月号の特集を読み、「自校の現状分析→学校教育目標の策定→指導」という一連の進め方には、多様な方法があると再認識した。自校に合う方法を検討するよい契機となった。

兵庫県 匿名希望

他校の先進的な取り組みに背中を押された

2月号の特集を読み、本校の現状を再確認できた。本校の学校教育目標は資質・能力ベースになっていないため、様々な取り組みが同じ方向を向いていないと感じている。まずは、生徒に育成したい資質・能力を検討して具体化し、それを生徒と教師で共有することから始めたい。そのためには、全校でこの危機感を共有し、校長のリーダーシップの下、取り組みを進める必要があるだろう。先進事例として紹介された学校の多くは、文部科学省や自治体から研究指定を受けたことを好機と捉えて、動き出していた。本校では新学習指導要領がきっかけになるだろう。探究学習にも意欲的な教師が増えている今がチャンスだと思う。他校の先進的な取り組みに背中を押してもらえた気がした。

石川県 匿名希望

ベテラン教師のメッセージに共感

2月号の特集で紹介された東京都立西高校の寺島^{もとむ}先生の2つのメッセージに大いに共感した。1つめは、教師による学習事項の精選の重要性で、それはまさに経験と結びつく面が大きい。2つめは、定期考査に対する

ゆるぎない姿勢だ。私も数年前から、定期考査後の最初の授業で答案返却と詳しい解答解説を配布している。

香川県・私立大手前高松中学・高校 佐藤浩章

志の高いリーダーの育成を目指す

2月号「指導変革の軌跡」の兵庫県立姫路西高校が取り組む探究学習が参考になった。昨今の進学動向を見ると、安全志向の生徒が多く、また、社会課題に取り組み、新たな価値を創造するような意欲が希薄だと感じる。防災や環境破壊、人口減少といった問題を解決する志を共有し、持続可能な社会のリーダーとなる人材の育成に努めていきたい。

徳島県 匿名希望

連載を振り返り、活用したいツールを改めて発見

毎号、「改良！指導ツール ビフォーアフター」を自分なりにしっかり読み込んでいたが、連載の5年間を振り返った2月号の同コーナーを読んだところ、活用したいツールが改めて見つかった。早速ダウンロードし、自分で作成したワークシートの改善に生かしたい。

東京都立北園高校 鈴木公美

記事を参考に、研修会や会議を充実させたい

「これからの会議・研修のあり方、つくり方」を毎号楽しみにしていた。研修会や会議を充実したものにするために、今までの記事の内容を実践していきたい。

鹿児島県立沖永良部高校 小倉良太

OFF SHOT



岩手県立高田高校での取材を終えたのは夕暮れ時。少しずつ遠くなる海を背に、取材陣はそれぞれの感想を語り合いながら、車で帰途に就きました。そうして話が尽きた頃、金賢治さんからいただいたCDをデッキに入れました。すると、P.24で紹介した、卒業生のために作った歌が流れ始めました。小雪が舞い散る街灯の少ない山道。車中に流れるメロディーに、それぞれが思いを巡らせていたのが分かりました。こんなふうに誰かと音楽に耳を傾けるのはいつ以来だろう。長時間の運転も寒さも気にならず、震災時に出身地の福島にいた私は、街一帯が停電し、人気の絶えた真っ暗な道を歩いた当時のことを思い出していました。復興の音^{おと}はまだまだ止まず、不穏なニュースも続くけれど、明日を信じ、今できることをしよう。心に宿った温もりを絶やさず、大きな火にしよう。そう思い、今もCDを聞いています。(河野)



『VIEW21』高校版が
電子ブックで
ご覧いただけます！

『VIEW21』高校版を電子ブックでご覧いただけるようになりました。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご確認ください。

HOME → 教育情報 → 高校向け → 情報誌最新号

VIEW21 最新号

VIEW21 高校版 2020 6 月号

次号は 6月19日発行 (予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

教師を育てた 言葉たち

No. 019

山口県立下関南高校 松村成通先生

まつむら・しげみち

◎教職歴31年。同校に赴任して14年目。進路指導部部長。担当する地理の授業でNIE(Newspaper in Education=教育における新聞の活用)を実践するなど、キャリア形成の土台としての思考力や表現力、主体的に学習に取り組む態度の育成に注力する。



14 年前、前任校から下関南高校への人事異動が新聞に掲載された直後、ある教え子からメールが届きました。そこには、「先生、お疲れ様でした」という言葉とともに、「確か下関南高校の校訓は、『日々に磨かん 智と徳と』でしたよね」と書かれていました。その教え子が、なぜ他校の校訓をわざわざ私に教えてくれたのか、その時は特に気にしませんでした。それよりも下関南高校で学ぶ生徒たちの気質はどのようなものかということに気持ちが向いていました。それまでの私の指導は、生徒にひたむきさ、がむしゃらさを真正面から求めるスタイルでしたから、そんな自分の指導が、次の学校でも通用するの不安だったのです。

案の定、赴任当初はうまくいきませんでした。授業中の態度について1人の生徒を注意したところ、その生徒がほかの生徒と一緒に「あの先生、うるさい!」と、私に反感を抱き、生徒たちとの距離が一気に広がってしまうようなこともありました。前任校の生徒たちは、まだまだ教師としての経験の浅い私の指導も、素直に受け止めてくれたので、反発する当時の生徒たちに私は戸惑いました。

そ れでも、生徒たちの様子をじっくりと見ていくと、この学校ならではの生徒特性が分かってきました。その1つが、生徒たちの中にある、下関南高校生としてのよきプライドでした。この学校では、集団としてひとくくりで叱咤激励することで全員を変えていくような指導は通じにくいのではないかと考えた私は、それまで以上に個別面談をする

ようにしました。そして、生活面や学習面の指導だけでなく、「そもそも、君は何を目標としてこの学校に進学してきたの?」などと、高校生活の本質を問う生徒との対話に一層重きを置きました。一人ひとりと話すと、生徒は自分のことをよく話してくれました。そうして生徒と丁寧に向き合ううちに、どの生徒も、心の中では自分の進路に対して真摯に向き合おうとしていることがよく分かりました。その結果、前任校とは違う、新しい指導スタイルが生まれ、それに少しずつ手応えを感じるようになりました。

着 任して4年目を迎えた頃のある朝、校門を入っ
てすぐ右手にある校訓碑が目に入った時、「私の求めていたものはここにあった!」と気がつきました。かつての私は、自分の指導観を信じていました。そしてそれは、一人ひとりの生徒への「こうだろう」「こうあるべきだ」という思い込みにもなっていました。しかし、日々を丁寧に生徒と過ごす中で、それぞれの生徒の事情がより鮮明に見えてきたことが、私をそうした思い込みから解放していきました。生徒との向き合い方は1つではない……実感を重ねるほど、私は指導の場面で迷うことが多くなっていました。そして、不思議なことに、そんな自分のあり方を心地よく認められるようになりました。

生徒と信頼関係を築くためには、「日々に」生徒を見つめ、耳を傾け、語り合うことが大切だと、本校の校訓が気づかせてくれました。残り少ない教員生活を、これからもこつこつと地道に頑張っていきたいと考えています。

山口県立下関南高校 全日制/普通科/共学/1学年約140人/2019年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、千葉大、神戸大、岡山大、山口大、九州大、下関市立大などに65人が合格。私立大は、青山学院大、法政大、関西学院大などに延べ127人が合格。

*プロフィールは2020年3月時点のものです。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume 1 2020年4月号
2020年4月15日発行 / 通巻第381号 発行人 山河健二 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング
©Benesse Corporation 2020

お客様
サービスセンター

[フリーダイヤル] 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～18:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17